

---

# メーデー

傘男

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

メーデー

### 【Nコード】

N8035L

### 【作者名】

傘男

### 【あらすじ】

まだ本場に神様が存在した時代、大切な宝物を魔術師に奪われた少年ミーノレスは、世界をほとんど何も知らぬまま旅立つ、何も知らぬまま…

とてもとても昔の世界を変えた冒険の物語。

## プロローグ、ミーノレス

(とつても大昔、まだ人が失われた秘技を使えた時代、まだ世界が宇宙じゃなかった時代、まだ本当に神様が存在した時代の物語。)

大陸中にその名を轟かせる、大国ディスクアの東方向数十キロ、緑溢れる、月の森の外れにぼつんとそびえ立つ、自身の一軒家でミーノレスは朝食の野菜炒めを作っていた。

今17歳のミーノレスの、父ケスケルは数年前に死別。母クララはディスクアよりもずっと遠く離れた、フェイルトという街で医者としての多忙な毎日。そしてたった一人の兄妹である、妹のシェイリは母の助手をしている為、ミーノレスは家に一人暮らしだった。

食事を終え、椅子に座り、じつと青い研ぎ澄んだダイヤモンド型の水晶のペンダントを見つめるミーノレス。

今よりもかなり小さい頃、まだ家族と一緒に、毎日にぎやかに暮らしていた頃、シェイリがミーノレスにくれた物で、ミーノレスの一番大切な宝物である。

「あつ。」

突然だった。何か、目に見えない何かがミーノレスの手からペンダントをひったくった。そして宙を舞うそれを捕まえようと立ち上がった時、ミーノレスはその何かが発した、凄まじい恐怖感に硬直してしまった。まるで複数の死を同時に体験するような、そんな恐怖感。

それからどれくらいの間止まっていたのかはミーノレスにはわからない。ただ彼がハっとした時、もうペンダントも、それを奪った何かもどこかに消え去っていた。

これが楽しい喜劇のような、悪夢の悲劇のような、一人の平凡な少年の、世界を変えた数奇な大冒険の始まりだった。

## プロローグ、ミノーレス（後書き）

シリアスな冒険物ファンタジーは本当に久々に書きます。ロストエ  
イジは僕の中ではコメディなので。

## 1、はなればなれの家族

(もしも彼が街に来ていた旧友に気付かなければこの物語はどうなっていたか)

長いとも、短いとも言えない茶色い髪に、高いとも、低いとも言えない身長、そして何よりも妹がくれた水晶のペンダントが大事、そんなミーノレスは世間知らずだが、それでも姿は見えないようにしながら、ペンダントをひったくったり、生かしたまま、まるで死のような恐怖を感じさせるなどという事が、普通の人には出来ないという事がわかっている。

そんな事が出来るのは魔術師と呼ばれる者達に間違いない。ただ問題はその中の誰がやったかだ。

魔術師など、ほとんど名乗っているだけの口だけ君を省いたとしても、まだ数百人はいるようなイメージである。

とりあえずミーノレスがわかっているのは犯人が透明になれる事と、死のような恐怖を人に与えられる事と、人の大切な所有物を何のためらいもなく奪う、気違いという事だけである。

ミーノレスはとりあえず物事を調べる状況の時、まず真っ先に思い浮かぶディスクアの巨大な図書館へと向かう事にした。

ミーノレスは足が早く、体力もある方で、さらに急いでいた為かなり全力で走ったが、それでもやはりディスクアは遠く、昼頃、出発した彼がディスクアに到着したのは深夜だった。

大都市ディスクアは夜も街中の街灯で明るく、ミーノレスが昔住んでいた頃とほとんど建物の配置も変わっていなかったので、図書館までは迷わずに行けそうだった。

昔と街は変わっていないなくても、ミーノレスはずいぶん変わっていた。彼の外見は変わっていない、性格やくせも、その今一ぱつとしない、

頼りなさそうな感じも変わってはいない。ただ変わったのは街を歩く彼の態度である。

昔は堂々と歩いていた街の道を、ミーノレスは今、フードを深くかぶって顔を隠し、ビクビクおどおどとした態度で歩いていた。

ミーノレス、正確には彼の家族もなのだが、とにかく彼は街のかなりの住人から恨まれ、嫌われているのだ。

その理由は数年前に遡る。

当時、家族4人、ディスクアの一軒家で、決して裕福とは言えないだろうけど、決して不満なんてない幸せな毎日を送っていたミーノレス達。

悲劇は突然訪れた。

学者だったミーノレスの父ケスケルは大学の実験室で、ミーノレスも詳しくは知らないが、とある生物実験に失敗し、ある病原菌を生みだしてしまった。

それこそ抗体薬が作られるまでの数ヶ月、ディスクアを恐怖で包みこんだ伝染病ルアルの菌だったのである。

パニックも収束し始めた頃、人々の怒りは、すでにこの世を去っていたケスケルの家族、ミーノレス達に向けられた。

すぐに母クララはディスクアに来る前、暮らしていたフェイルトに二人の子供を連れて行こうとした。

しかしミーノレスは反発した。

「堂々とここで暮らせばいいじゃないか、親父の実験と俺達は何の関係もなかったし、母さんは危険を承知で、過労で何度も倒れたって患者の事ばかり考えてたのに。」

ミーノレスは絶対にここで残る、ディスクアで暮らすと聞かなかつた。そして家族の道は途切れる。

クララとフェイリはフェイルトに旅立ち、ミーノレスはディスクアの一軒家に残った。そして度重なる嫌がらせにも耐えたミーノレスも、一軒家が何者かに焼き払われたのを機に、結局ディスクアを去る事になる。

ただ最後に結構なケンカ別れをした母と妹の元には、どうにも行きづらかったミーノレスは、ディスクアから見て、フェイルトと反対方面の月の森で、小さな小屋のような、今の家を建て、暮らす事にしたのだった。

本当は今でも家族が大好きな、だけど今の状況を変えられない、そんな臆病で哀れなミーノレスだからこそ、何もせず、ただ昔、妹がプレゼントしてくれたペンダントを大切にしていたという訳である。

「ふう」

図書館に着いたミーノレスは一息ついてから、フードは深く被ったまま、館内へと入って行った。

ミーノレスはあまり本を読まないが、いざ読み出すとかなり早い。そしてかなり没頭する。そんなミーノレスでもさすがに疲れたのか、3冊目の本を少し呼んだ所で、うとうとと眠りについた。

それから翌朝、何時頃かはわからないが、目覚めたミーノレスはすぐに調べ事を再開した。

ある程度の資料を読み解く限り、やはり犯人は魔術師だろうと改めてミーノレスは考えた。

まず物を透明にする術は、低級から高位まで、幅広く使われる悪魔の技であり、さらに人に、ミーノレスが味わったような、複数の死のような体感を与えるのは、かなり高位の悪魔の技らしい。

悪魔、特に高位の悪魔は自分から自分の手を汚す事など絶対にならないらしい。そしていかに強力な魔術師でも、高位悪魔の術を真似る事など出来はしない。

つまりミーノレスのペンダントは魔術師に使わされた高位悪魔、元を辿れば高位悪魔を従えられるほど強力な魔術師に奪われたという事になる。

しかし犯人の目的だけはよくわからなかった。実はペンダントの水晶が、魔力が自然に宿った、いわく付きの魔法石とかそんなオチな

のだろうか？

「はあ」

今度は深く落ち込むミーノレス。

犯人は強力な魔術師。より正確に犯人がわかったとして、何の特別な力もない自分に取り戻せるのだろうか？

少しだけの迷いの後、ミーノレスは決心し立ち上がる。

そうだ、びびってたって始まらない。やれるだけやってみよう、どうせ数年前に殺されてたのかも知れない命なんだ。

ミーノレスはある計画を立て図書館を立ち去った。玄関口ですれ違った懐かしい顔に気付く事はなく。

「ミー、ノレス？」

すれ違いの後、すぐに振り向き、呟くミーノレスと同じ歳くらいの銀髪の少年



## 2、魔術師ネイトレッサ

(一緒に遊んだり、楽しんだり、時にはケンカしたり、それが友達。ろくでもない奴ばかり、それが魔術師)

図書館を出て少し、人気の少ない路地に差し掛かった時、

「ミーノレス」

自分にしか聞こえないくらいの声で名前を呼ばれ背中を叩かれたミーノレス。声だけで誰が自分を呼んだのかはほぼわかったが、一応振り返るミーノレス。

そこにいたのはミーノレスより少しだけ背の高い銀色の短髪少年。忘れる訳もない、今までどんな時でも助けてくれた友達、ラグ。

「待てて」

瞬間、逃げようとしたミーノレスの、フードを押さえる両手の片方を、素早く掴み彼を止めるラグ。

「大声で叫ぶぞ、ミーノレスがいるって」

ラグの独り言のように言った、この言葉は効果抜群だった。まるで時が止まったかのように、ピタリと硬直するミーノレス。

「ラグ」

「大丈夫、いいから家に来て、そっちはどうか知らないけど、俺の方は言いたい事たくさんあるんだ」

それから半ば強引に、ちょっと懐かしいラグの家まで連れて来られたミーノレス。

「ただいま」

元気よく、家の玄関のドアを開けながら言うラグ。

「おか、え、り。ミーノレス？」

息子と一緒に帰って来た思わぬ来客に驚くラグの母、サリア。ミーノレスは少し居心地悪そうに、对象的にラグは楽しそうにニヤニヤ

していた。

「久しぶりです、サリアおばさん」

丁寧にお辞儀するミーノレス。

「久しぶり、ほんつとうに久しぶりミーノレス、あなた今まで何処に？ああ、本当によかったわ、私達てつきり、もうあなたは死んでしまったのかもと、本気で考えてしまったのよ」

「ご心配かけてすみませんでした。街を出る時、伝言くらい残しておけばよかったと今更ながら思います」

もうほとんど泣きそうなサリアに心から謝るミーノレス。

申し訳なく思う一方、彼は心の底から、どうしようもなく嬉しかった。まだ自分はラグ達一家と友達、それがとても嬉しかった。

「いいの、生きていてくれただけでよかったわ、それにずいぶんやつれてるわよ、今日は泊まりなさい、パルもアルノもあなたならきつと大歓迎よ。明日はちょうどセズアとスニも来るし、2人共喜ぶわ」

パルはサリアの夫、つまりラグの父で、アルノはラグの3歳年上の兄である。そしてセズアはアルノよりさらに10歳年上のラグの姉で、スニは彼女の息子だった。

「ありがとうございます」

ミーノレスはサリアの親切を拒んだりはずせず、ただ顔を伏せて、震える声で呟いた。同時にセズアの夫クラレスの事を考え、少し胸が痛くなる。

クラレスはルアル病原菌の犠牲者だが、彼は生来の、明るく優しい性格で、その命が尽きる間際まで、ミーノレス達一家を気遣ってくれていたのである。

「ありがとう」

誰にも聞こえないくらい小さな声で再び感謝を呟くミーノレス。

サリアの言った通り、パルもアルノも本当にミーノレスとの再開を喜び、歓迎してくれた。

ミーノレスが自分以外の誰かと話したり、笑ったりしながら食事を

したのは、家族がばらばらになってしまっただけで、以来初めての事だった。そしてあつという間に日は暮れた。

「どこに行く気？ミノーレス」

休ませてもらっていた部屋を、窓から抜け出し、外に出たミノーレスにかけられる、待ち伏せていたかのように、タイミングよく玄関から出てきたラグの不機嫌そうな声。

「ラグ」

またかなり罰が悪そうだなミノーレス。

「ミノーレス、一人で抱え込まないで、正直に全部話してくれよ、この街に戻って来た訳、何があつたか、何をしようとしているのか、俺はそんなに信用出来ない？」

「そんなこ「俺達、友達だろ」

ミノーレスのとつさの弁護を、はつきり怒りの入った声で遮るラグ。

「話してくれなきゃ、お前の罪を増やしてやるぞ」

あまりのラグの迫力に、少しの間、何も言えずに黙り込むミノーレス。

こんなに怒ったラグを見るなんていつぐらいだろう。

「街の奴らいかれてるよ、お前やおばさん達の事まるで地獄の使者みたいに言うんだ」

「絶対気にするなよ、俺は絶対あいつらみたいに狂ったりしないからな」

あの時、ミノーレス達家族をかばってくれた時が最後。

「ごめんラグ、本当にごめん。全部話すよ」

ミノーレスはそして、ここまでのいきさつと、自分がこれからしようとしている事を全て話した。

大切なペンダントが奪われた事、犯人を高位悪魔を使役出来る魔術師だと考えている事、そして考えた計画。ディスクアの魔術師の多

くが暮らしている、デイスキアの巨大な王城に侵入し、片っ端から魔術師の荷物を勝手に調べる計画。

「絶対に辞めとけ、ミーノレス、お前が何と言っても、例え俺達の関係にひびが入る事になったって絶対にそんな事やらせないぞ」  
ラグのこの反応はまったく予想通りだった。

確かに王城に侵入するなど馬鹿げている。ましてや魔術師達の部屋や荷物を勝手に漁るなどもつての他だ。王城への不法侵入自体大きな罪なのに、さらにその上で魔術師相手に問題を起こすなど、下手をしなくても死罪物である。

「でもどうしてもペンダントを取り返したいんだ。俺達一般人には魔術師とのコネなんてない訳だし、これしか方法がないんだ」

ミーノレスの微妙ながら、それでもちゃんとした覚悟はラグにはよくわかった。

そして彼はミーノレスをうまく問いただせて、よかったと心底思う。なぜならミーノレスは知らないのだ。今ラグには、正確にはラグ達一家には、ミーノレスがまだ街にいた数年前にはなかった、ある魔術師との大きなコネがある事を。

「スニの事、覚えてるだろ？」

「ああ」

唐突なラグの質問に戸惑いながらも頷くミーノレス。

ラグの姉、セズアの息子スニ。家系のほぼ全員がパルの銀髪と、サリアの活発さを受け継ぐ中、1人サリアの黒髪と、パルの謙虚さを受け継いだ変わり者。

「あいつ、お前が街から消えたばかりくらいの時期に、ちょうど魔術の才がある事が判明して、今はネイトレッサって魔術師の弟子なんだぜ」

ニヤニヤしながら言うラグ。

ミーノレスは何が何だか混乱していて、ラグの言った事を、頭で整理するのに手間取った。

「ネイトレッサって、もしかして、あのネイトレッサ・ミューオン

「？」  
とりあえずそれを聞いた。魔術師のネイトレッサ・ミューオンと言  
えば、杖の一降りで、夢のような奇跡を起こすと云われている、大  
魔術師である。

「ああ、そのネイトレッサさ、俺も最初は焦ったよ、ほんと」  
少し懐かしそうなラゲ。

「それじゃもしかしくなくても、彼が助けしてくれるかも知れないって  
事？」

今やさつきまでの暗い雰囲気は消えうせ、期待に満ちた表情のミー  
ノレス。

「かもつていうか、ほぼ間違いないぜ。彼の事だし話を聞いただけ  
で、犯人がわかるなんて事もあるかもだし」

一般人の魔術師への想像はとにかく凄かった。

「とにかく明日、スニが来たら事情を話そう」

「ああ」

そうして2人はそれぞれの寝室へと戻った。

「なるほどね。わかった。そうゆう事なら師匠せんせいも助けてくれると  
思う。今から会う？」

事情を聞いたスニは笑顔で、すぐそう言ってくれた。

「ああ、ありがとうスニ」

「どういたしまして、ミーノレス」

ミーノレスの礼に満足気に頷くスニ。

それからスニに連れられ、個人所有とはとても思えない、大きな  
城のようなネイトレッサの家に行って来たミーノレス。

「でかい」

いろいろ圧倒されるミーノレス。

「わかるよ、僕も最初は驚いた」

うんうんと頷くスニ。

「これでも魔術の道を行く者の中では大分、謙虚な方だと自分では思っているよ」

後ろからの突然の声に振り返るミーノレスとスニ。

そこには目の前の城家の主、紺色のローブを纏った、ボサボサの白髪に紫色の瞳の魔術師、ネイトレッサ・ミューオンが不適な笑顔で立っていた。

「師匠せんせい」とスニ。

「やあスニ。それと初めましてだな、ミーノレス君」  
不気味な深い笑みを浮かべるネイトレッサ。

「俺の事を？」

驚くミーノレス。

「まあ有名だからね。」

言いながらもミーノレスとスニの間を、歩き、通り抜けるネイトレッサ。

「顔は知らないはずではないですか？」

ほんのちよつとの思考の後、尋ねるミーノレス。

「魔術師をあまり舐めてもらっては困るね」

振り返り、またニヤリとするネイトレッサ。

「他人の名前から顔とかを予測する術があるんだ」

スニのひそひそ声の捕捉に「ああ」と納得するミーノレス。

「さっ、何か用があるんだろう、とりあえず中に入って、お茶くらい出すよ」

それからネイトレッサの城家の玄関から入ってすぐの広間で向かい合ったネイトレッサとミーノレス達2人。

「そうゆう事か」

全ての事情を聞き終えたネイトレッサ。

「誰が取ったのかはわかりますか？ それとわかったとして、取り返せると思いますか？」

1番気になる要点だけをまず尋ねるミーノレス。

「誰が取ったかはおそらく調べる事が可能だよ、だけど取り返せるかどうかはその犯人次第かな」

言いながら部屋の端の隠し棚から、1冊の本を手に取るネイトレッサ。

「ネイトレッサさん」

「ネイサって呼んでくれ、知り合いはみんなそう呼ぶ。さんもない」

早口でそれだけ言い切るネイトレッサ。

「ネイサ、犯人の目的が全然わからないんですけど」

「ん〜、なんて言うか」

ミーノレスの質問に少し言葉に詰まるネイトレッサ。

「大事にされてる物って、膨大な魔力が宿りやすいんだ。でもその事を知ってる人は、どうしてもそれを思う気持ちのどこかに欲が入っちゃって、欲は魔力の宿りを妨げちゃうから」

「魔術師は何も知らない人が大事にしてる物を奪うって事だな」

スニの説明の最後に付け足される、若干の怒りを感じさせるミーノレスの声。

「まあ否定はしないさ、魔術師の9割くらいはそんな感じだ」

どこか遠い目のネイトレッサ。

「あなたは？」

なんとなく笑顔のミーノレス。

「僕は1割の良識ある魔術師さ。だから忠告しておくよミーノレス。関わる相手の魔術師によつては、命の危機だってあるかも知れないよ、それでも、「いいです」

自分を遮るミーノレスの固い決意に、フッと息をつくネイトレッサ。

「大丈夫さ、最悪でも僕が守ってやる。大船に乗った気でいなよ」

「師匠せんせい」と凄く嬉しそうなスニ。

「どうして知り合ったばかりの俺にそこまで？」

失礼かも知れないが、ミーノレスは聞かずにはいられなかった。

「何、簡単な事。ミーノレスはスニの友達なんだろ、ならスニの師

匠である僕の友達でもあるって訳だ。その友達が困ってる時、助けるなんて当たり前じゃないか」

当然とでも言いたげなネイトレッサ。

「ありがとう」

「ございます、はつけなかった。」

走りではなく、馬車を使ったので、ミーノレスの家には夕方着いた。

「間違いなく魔術師に使わされた悪魔の仕業だよ」

家の玄関のドアを開くのと同時くらいに呟くネイトレッサ。

「やっぱり」とミーノレス。

「犯人を特定しよう、少し離れて、ミーノレス、スニ」

言われた通り、ネイトレッサから距離を取るミーノレスとスニ。

ネイトレッサ自身、家から少し離れ、持っていた本の何ページかを開き、何か、ミーノレスには理解出来ない言葉で、何かを唱え始めた。

「あれが呪文？」

隣のスニに小声で尋ねるミーノレス。

「少し違うかな、あれは古代の世界に使われていたっていう言葉で、<sup>せんせい</sup>師匠はただ頼み事をしてるだけなんだ」

スニが言い終わるか、終わらないくらいの時、ネイトレッサの少し前に回転する火柱が立ち、彼は言葉を止めた。火柱はやがて人の形を成し、いつの間にか緑の衣服をまとった、全身のあらゆる場所に弓と矢をくっ付けた、黒髪の、ものすごく眠たそうな顔の青年となっていた。

ネイトレッサはまた古代の言葉を喋り、青年もまた、それに答えるように古代語で喋った。何を言っているかは全然わからないが、その声はどこかだるそうな感じだとミーノレスにもわかった。

そしてしばらくすると、青年はまるでそこに何者もいなかったかのように、スッと消え去った。



「今のは、悪魔？」

それとはずいぶんイメージが違う、先ほどの青年の正体に対するミ  
ーノレスの疑問。

「僕も実際に見たのは初めてだけど、多分さっきの彼が、せんせい師匠が使  
役する悪魔、レラージュだと思う」

若干興奮気味のスニ。

「正解スニ。それとミーノレス、犯人がわかった。魔術師、ファイ  
ロ・ニュートリノ。彼は僕と同じでディスクアに住んでる」

ネイトレッサの言葉に、今度はスニもミーノレスと一緒に驚く。

ファイロはネイトレッサと同じ師の元で学んだという、ネイトレッ  
サと同じくらい有名な魔術師である。

そしてファイロ、彼が数年前、ミーノレスの運命を大きく変えた事  
を知る者はほとんどいない。ネイトレッサもミーノレス本人も、そ  
れをしたファイロでさえ知らない。

## 2、魔術師ネイトレッサ（後書き）

こんなまじめな話、マジで久々。

### 3、理不尽による旅立ち

(冒険に1番必要なものは何か？平民は食料だと言い、魔術師は知識だと言う。実際に幾多の冒険を繰り返した熟練の冒険家は言う、どちらも違う、1番必要なのは運だ)

「彼は「僕と彼の関係なら気にしなくていい、僕らは一緒に修行をしていた頃から、お互いに全然相入れない存在だったんだ」

ミーノレスの不安を感じとったかのように、彼を遮るネイトレッサ。「それにファイロが犯人なら納得だよ、そもそも状況を聞いた時から彼が怪しいと思ってたからむしろ納得さ、長時間、透明でいたり、人に恐怖感を与えたりは彼が使役するグラーシャラボラスの得意分野だからね」

ネイトレッサの言葉の随所にちりばめられた、滲み出るような怒りは、ミーノレスにもスニにもはつきりとわかるほどだった。

「せんせい師匠」

少し心配そうなスニ。  
それから少しの沈黙。

「ファイロに会いに行こう。おそらく何か交換条件を出されるだろうけど、それが出来るような事かどうかは五分五分だよ」

いつの間にか落ち着いていたネイトレッサの言葉に頷くミーノレス。

それからディスクアに帰り、今度はネイトレッサの城家の数倍はある、ファイロの城家に訪れたミーノレス達3人。

「いいか、ミーノレス、君は絶対に喋るな。感情に身を委ねるとろくな事がないからな。」

「わかった」

念入りのように言ったネイトレッサの注意の言葉に、あまり意味の

わからないまま返事をするミーノレス。

家に入って最初の巨大な廊下に、台風の中を走った後のような、ボサボサの青い髪に、黒い瞳、少年のような低身長の魔術師、ファイロは立っていた。

「事情はわかっている。これを返して欲しいんだろ？」

ミーノレス達の中の誰かが何か言う前に、そう言って目的のペンダントを見せるファイロ。

「多分、使い魔に監視されてたんだよ、師匠せんせいが外出なんて凄く珍しいしね」

不思議そうなるミーノレスに小声で説明するスニ。

「ファイロ」

「紅き塔の王の剣」

またネイトレッサが何か言う前に、言うファイロ。

「それを取って、ここに持ってきて、俺によこすのが、これを返す条件だ」

「あかき？ 王の剣？」

聞き慣れない名前に、つい聞き返してしまう世間知らずのミーノレス。

「それ以外に選択肢はないの？」

今度はファイロがミーノレスの問いに答える前に、少し怒り気味に尋ねるネイトレッサ。

「ないな。この条件が呑めないなら諦める」

「呑みます」

ファイロの笑顔の言葉に、ネイトレッサの注意も完全に忘れて、反射的に叫ぶミーノレス。

「待て、彼は遺物の呪いの事も、紅き塔や王の剣という名称さえ知らない」

一転して慌てた様子で早口に言うネイトレッサ。

「残念ですがね、ネイトレッサ・ミューオン。あなたもよくご存知の通り、悪魔の前での互いに了承しての約束事、交換条件は取り消

せない。例えあなたやファイロがあのにつききの女の弟子だとしてもね」

いつの間にかミーノレス達の隣に、何気なく立っていた耳が犬のそれであり、さらに背中に鳥のように小さな羽が生えた青年が言った。「グラーシヤラボラス」

また少し、ミーノレスやスニにもわかりやすい、はっきりとした憎しみを垣間見せるネイトレッサ。

「そうゆう事だ。残念だったなネイサ。すでに約束は終えた。お前が今更どうしよう」と

もう落ち着いた感じのネイトレッサがローブの内ポケットから出し、構えた銃に気付いて言葉を止めるファイロ。

「俺を殺すか？禁忌の1つも侵していない俺を」  
何も言わないネイトレッサ。

ミーノレスもスニもその重苦しい雰囲気にも何も言葉を発せなかった。「撃てよネイサ。俺は今、術どころか、お前が構えてるそれから発射されるだろう、鉛弾への対策すらもしていない。引き金を引くだけでかく「黙れ」

ファイロを静かに遮るネイトレッサ。

「行こう、ミーノレス、スニ」

銃を下ろし、さっきまでの彼からは想像すら出来ないほど、優しい笑顔で言うネイトレッサ。

「哀れで、とても憎い奴」

家を出る時、ファイロがそう呟くのをミーノレスは聞いた気がした。

「このバカ、喋るなって言ったのに」

ネイトレッサの家に戻り、ミーノレスを振り向いた彼の第一声。同じ怒り声でも、ファイロやグラーシヤラボラスに対するそれとは明らかに違っていた。

「ごめん、つい」

素直に謝るミーノレス。

「過ぎた事を悔やんでたって仕方ないな。ミーノレス、君はどうしてもあのペンダントを取り戻したいんだな？」

「うん」

しばらくの沈黙を破るネイトレッサの質問にすぐ首を縦に降るミーノレス。

「あのペンダントは命より大事な物なんだな」

「ああ、大事」

険しい顔で尋ねるネイトレッサに、強く答えるミーノレス。

「よし、君の覚悟はわかった」

若干落ち込んだようなネイトレッサ。

「待って、せんせい師匠、ミーノレスを行かせるのは駄目です。彼は「覚悟を決めた者だ。大事な物を取り戻す為に命を懸けられるほどの覚悟を」

スニを遮るネイトレッサ。その気迫にスニは複雑な面持ちで黙り込んだ。

「あの、真面目な雰囲気壊すようで悪いんだけど、いったいどういう事になった訳なの？ 俺は何をすればいいの？」

実は自分から聞くのは少し怖かったのだが、勇気を出して尋ねる、1人何がどうなってるのか、実はよくわかっていなかったミーノレス。

「いいかい、ミーノレス、君がペンダントを取り戻す為にやれる行動は1つだけだ、それはこのディスクアから遠く南西の方向に立つ、紅き塔と呼ばれる塔の最上階に安置された王の剣を取って来る事だ。紅き塔は地図には乗っていない、フェイルトという街を知ってるかい？」

珍しくよく知っている名称にふるふると首を振るミーノレス。

「そのフェイルトを目指すのがいい。そこからなら紅き塔まで近いし、行き方も住人に聞けばわかる。そしてここまでは大した課題じゃない」

いったん言葉を止めるネイトレッサ。ゴクリと息を呑むミーノレス。  
「問題は王の剣だよ」

「呪いがかかっているかも知れないって事？」

自分が手に入れた、魔術に関するこれまでの知識から答を推測する  
ミーノレス。

「かもじゃなく間違いない。それも剣を手にするまではどんな呪い  
なのかもわからない」

「そうゆう事か」

ようやくネイトレッサ達の慌てぶりの理由が分かったミーノレス。  
つまりはファイロは何らかの（おそらく魔術に関する）理由で古の  
王の剣が欲しい。しかし王の剣を直接盗んだ者には、どんな恐ろし  
い呪いが待ち受けているのかもわからない。そこでミーノレスを使  
い、剣を盗ませようと考えた訳である。

「でも止めないよ、ペンダントを取り戻せる可能性があるのなら」  
変わらない決心を、変わらない態度でまた口にするミーノレス。

「そっか」

何かを悟ったようにフッと笑うネイトレッサ。

「交通費は出してあげるよ」

「あつ」

ネイトレッサが言うのとほぼ同時に声を出すスニ。

「どうしたスニ」とネイトレッサ。

「せんせい師匠、問題はまだありました、しかもかなり厄介だと思われま  
す。ミーノレス、多分ミーノレスは境界道きょうがいどうを使えないと思う、今、門の  
管理をしているのはあのサイリスなんだ」

スニの言葉に一瞬で、旅の難易度がありえないほど急に上がった事  
を悟るミーノレス。

境界道とは、危険な場所を通らずに、様々な国から国へ移動出来る  
ように作られた、それらを繋ぐ、途中から入る事は決して出来ない  
ように設計されている、長く巨大な橋の道であり、利用する為には  
それぞれの国の管理をしている者に、通行許可を貰わなければなら

ないのだが、ミーノレスにとって不幸な事に、現在管理をしているのが、ルアル菌の事でミーノレスにかなりの憎しみを抱いている青年、サイリスだったという訳である。

ミーノレスはサイリスをとて怖がっていて、顔を見られたくもなかった。何を隠そう、彼こそミーノレスの家を焼き払った張本人なのである。

「フェイルトまで外れの道を使うしかない。ミーノレスはデイスキア以外の街に行った事ないんだろ？」

尋ねるスニに頷くミーノレス。生まれた街と境界道を使って訪れた事のある街でないと通行許可は絶対貰えない決まりなのである。

「外れの道に行く事にする」

迷った末、結局そう決めるミーノレス。

「確かに勝手に境界道を使うのだけはやめといた方がいいね、デイスキアだけじゃなく世界中で命を狙われる事になってしまう」

言いながらも、慌てず、慣れた手つきで床下の隠し扉を開けるネイトレッサ。

「ミーノレス、これを」

非常に上手く作られている、木製の銃をミーノレスに手渡すネイトレッサ。

「これは？」

木製銃を手にとった瞬間、少し不思議な何かを感じるミーノレス。

「それはエスネス・エクス、単に略してエクスと呼ばれる特殊な銃さ。外れの道には僕も何があるのかよく知らないけど、危険がたくさんあるのは間違いないと思う、そんな危険からきつと君を守ってくれる。というか何かで危なくなったら、とにかくその引き金を弾け、ほぼ確実に危険は遠ざかる」

少し楽しそうに話すネイトレッサ。

「ありがとう、ネイサ」

エクスを上着の内ポケットにしまうミーノレス。

「それとスニ、君も行くといい、知識だけなら君はもう一流の魔術



師と何ら遜色ない、必ずミーノレスの役に立つ。修業にもなるだろうしね」

「僕が行くくらいなら師匠せんせいの方がよくないですか？」

ネイトレッサの提案の後、すぐさま尋ねるスニ。

「いや、僕もついて行ってあげたいけど、おそらく僕はここを離れない方がいい」

それから窓から見えるファイロの家の方を向くネイトレッサ。

「ファイロ、正直、今回の事はもしかしたら、この街で唯一あいつを警戒してる僕を遠ざける為なのかもしれないんだ。正直僕はあいつが怖い、昔からあいつは何を考えてるのかわからない所があったけど、今は何か、とにかく不気味に思えるんだ」

言葉も体も震えるネイトレッサ。

それからラグ達も含めた話し合いの結果、結局同行者はスニだけに決まった。

「気をつけてねミーノレス、スニ」

内心はかなり心配しているがそんなそぶりは見せないサリア。

「ありがとう、おばさん。みんな、きつとまたその内」

笑顔のミーノレス。

「またなミーノレス、スニ」

「必ず帰ってきてね」

「また」

「頑張れよ」

それぞれ別れの言葉を済ませるラグ、セズア、アルノ、パル。

「それじゃ行ってきます」

最後にスニがそう言って、ミーノレス達はディスクアを後にした。

「うまくいくかねえ？」

ファイロの家の部屋の一室、まったく臭いのない、白い煙が漂う部屋の窓際で、自分の犬耳を心地よさそうに手ですりすり触っている

グラーシャラボラスが言った。

「必ずうまくいくさ。必ずな」

何を考えているのか、悪魔でさえ読み取れない無表情で、椅子に腰掛けたファイロはそう返した。

彼らはミーノレスがこの旅で、もしくは王の剣の呪いで死のうが、死ぬまいがどうでもいいと思っている。

死ななければ計画を実行するだけだし、死んだら中止するだけである。

ミーノレスとスニの旅立ち。それが全てを変えた冒険の、目に見える範囲での始まり。

#### 4、竜骨の森の白き獣

（旅はいつも辺りにご注意。この世界ではいつ何があなたを見て  
いるかわからないから）

デイスキアを発つて数日、ミーノレスとスニは見事なまでに迷っていた。生い茂る木々に覆い隠された日差し、手の平ほどの大きさのチヨウチヨやトンボが自由気ままに飛び交う森、そんなとても涼しい森。

「ここは何て森なの？ それはわかる？」

「ここは多分、竜骨カウボウの森だね」

歩きながら、ミーノレスの質問と答えるスニ。

「竜骨？ 骨なんてどこにもないぞ」

歩くのを続けながらも、辺りの地面を見渡すミーノレス。やはりどこにも骨など見当たらない。

「骨があるからそうゆう名前って訳じゃないんだよ、昔とある大きな竜が死んだ時、溶けて行く中、最後に残った一本の背骨が森となつたのがここなんだって」

「つまり竜の骨があるんじゃないやなくて、竜の骨が森になったから竜骨の森って訳ね」

ミーノレスの言葉に満足気に頷くスニ。

「ところでスニ」

立ち止まるミーノレスを少し先で振り返るスニ。

「何？」とスニ。

「さっきからどんどん虫が減ってきてると思うんだけど、何か原因があると思う？」

ミーノレスの問いにスニはビクンとする。

「ちょっと前に小さいのを5匹くらい見た気がするんだけど」

言いながらも辺りを素早く見渡すスニ。

「子供達つてけっこう遠くまで遊びに行くもんだよな。大人が行かない危険地帯と」

何か鳥のヒナが叫びまくっているような音に言葉を止めるミーノレス。

「ミーノレス、やばい」

「だろうな」

スニに頷きながらもエクスを構え、スニの方を向けるミーノレス。スニはミーノレスが何か言う前にすぐにハツとし、横に移動しながらも後ろを振り向く。巨大な牙を持った白いクマのような生物が、ミーノレスの持っている物も恐れず、彼目掛け走って来ていた。

「くっ」

エクスは結局撃たず横に跳び、生物をかわすスニ。

「ミーノレス、何してるの？それを撃つて。」

それからエクスを使わず生物を紙一重で避けるミーノレスに叫ぶスニ。

「ここはこいつの」

「縄張りだよ、それがどうした」

木にぶつけられエクスを手放してしまうミーノレス。

「うつつ」

一度吠えてから痛がるミーノレスにとどめを誘うと左手を大きくあげる生物。しかしそこで生物は悲鳴を上げ、ミーノレスを離し、どこかへ走り去った。

「スニ」

申し訳なさそうに呟くミーノレスに駆け寄るエクスを拾い撃ったスニ。

「ミーノレス、これは殺す為の武器じゃない、危険を避ける為の道具なんだ、だから撃つて大丈夫、師匠が危険な物を友達に渡す訳がないんだよ」

エクスをミーノレスに返すスニ。

「ごめん」

ミーノレスのいろいろな意味を込めた謝罪。

「いいさ、それに今はここから離れる事が先決だよ。さっきの動物はウルムシカ、縄張りには群れて暮らしている動物さ。」

「また」

ミーノレスが立ち上がった瞬間、またしても聞こえる鳥のヒナの鳴き声のような音。

「ミーノレス、木に登ろう、ウルムシカは登れないんだ」

ミーノレスが答える間もなく、素早く近くの木に昇るミーノレスとス二。

「縄張りから離れるのは諦めて正解だな」

凄まじく組織的にミーノレス達の登った木の下に群がるムルウシカ達を見下ろし、呟くミーノレス。

「でもこの状況はかなりやばいよ。僕らの武器はエクスだけ、さっき一発撃つて見てわかったけど、エクスは撃つた者に、その相手が苦手な物を感じさせるんだ。それでその場所から、というかエクスから逃げたくなる訳だけど」

「下の連中の中にさっきのウルムシカもいるんだな」

ミーノレスが続けた言葉に頷くス二。

「数えて見たけど下には30体はいる。全員をエクスだけで退けるのは確かにちょっときついよな」

ミーノレスの言葉に今度は何も答えず、ス二は青ざめた顔をさらに青くした。

つまりはエクスは同時に複数撃てないので、ウルムシカ達を退けるには、1体、1体を順に撃っていくしかないのだが、エクスを撃たれたウルムシカの立ち直りの早さから考えると、最後の1体を撃つ頃には、最初の一匹がまた元気になり襲って来てしまうという事である。

「木と木を跳び移っていくのも無理っぽい」

呟くミーノレス。1本、1本の木は跳び移るには確かにちょっと離れすぎていた。

「言っておくけど僕の術には期待しないでね、自然動物に何か出来るような事は出来ないよ。」

相変わらず青ざめた顔のスニ。

「ロープみたいなものの代わりは発生させられない？」

「師匠せんせいなら出来」

八つとして言葉を止めるスニ。

「そうだよ、ミーノレス、エクスで何とかなるかも」

「これはウルムシカじゃなくて、危機を遠ざける物だから？ 今、この状況も何とか出来るかもって事？」

ミーノレスの言葉に頷くすっかり興奮した様子のスニ。

「まあ物は試しか」

しかし試しとは時にうまくいかない物。一番近くの木の子枝に向けたエクスは、引き金を弾いても何も放つ事はなかった。

「終わつたよ、ほんと」

今度こそ心底諦め、へたり込むスニ。

「いや、1つ思いついたよ、まだ絶望するのは早いぜスニ」

それからニヤリとして、下を見、息を整えるミーノレス。

「ミーノレス、あの中の1体を操って逃げる作戦なら絶対無理だよ、移動してるウルムシカに一定時間乗り続ける為には、3年の練習期間が必要らしいから」

「うっ」

作戦を実行する前に止められ、動きを止めるミーノレスにため息をつくスニ。

「そんな事だろうと思った」

二の句も告げられないミーノレス。

「奴ら、凄い力なんだよな？」

「まあ」

しばらくの沈黙の後、唐突なミーノレスに頷くスニ。

「エクスを遠隔操作する事は出来る？」

「そんなに距離が、いや、目に見える範囲くら、そっか、そういう

事か」

ス二にまたニヤリとするミーノレス。

「多分いけるよ、て、考えは多分同じだよな？」

「俺の考えはウルムシカの内の適当な1体を勢いよく木にぶつけさせ、振動で木が揺れた時に跳び移るって感じ」

言いながらもエクスをス二に手渡すミーノレス。

「同じ、さっそく実行だね」

それから目を閉じ、また何やら、おそらく古代語を唱えるス二。

「スフォー」

最後に大きくそう言っただけでエクスを前に軽く投げるス二。エクスはどこかへいく事もなく、ただミーノレス達の少し前の空中で静止した。

「後はタイミングだね」

「ああ」

ス二は今度は言葉を使わず、手をひらひらさせたりもせずエクスを、自分達の乗っている枝のある木に向かっていているウルムシカの1体の後ろの空中へと移動させた。そして物理的に誰の手も借りる事もなく放たれるエクス。

「「うっ」」

思っていた以上にウルムシカのタツクルによる木の揺れは激しく、驚いたが、目的だった隣の木への跳び移りは簡単だった。

それからもうやって隣、隣へと木の上を移動していくミーノレスとス二。

「もう追って来ないのかな？」

1つ前の木の下辺りからまったく近づいて来ないウルムシカ達を見て呟くミーノレス。

「縄張りを出たんだと思う、ウルムシカは餌を手に入れる以外の目的じゃ縄張りを絶対に出ない習性があるから」

心底ほっとした感じのス二。

「あれは俺達を木から降りてこさせる為の作戦って事は？」

「ウルムシカにそんな知能ないよ」と飛び降り準備万端のス二。

「だといんだけど」

そして木をほとんど同時に降りるミーノレスとスニ。

「本当にだよかった」

結果的にはスニが間違っていた。ウルムシカ達が止まっていたのはミーノレス達が縄張りを出たからではなく、彼らを木から降ろさせる作戦だった。

「でももうすぐ縄張りを出るのは間違いないよ、僕ら大分進んだはずだし」

「それまでは走って逃げるしかないって訳ね」

全速で走りながらも言い合う2人。どの道凄い早さのウルムシカ達から長時間逃げるなんて確実に無理だし体力は気にならなかった。

「あっ」

「スニ」

つまづいたスニをすぐ振り返るミーノレス

「ああ、もう」

エクスを構え、まさに今スニに襲いかかろうとしたウルムシカにそれを撃つミーノレス。そしてエクスを撃たれたウルムシカが逃げ出すのとほとんど同時くらいにスニの服を掴んで、精一杯後ろに跳び、別のウルムシカの降り下げる手をかわすミーノレス。

「こ、今度こそ出れたみたい、縄張り」

寸前のところで近づいて来ないウルムシカを、倒れた体制のまま見ながら言うスニ。

「ああ、そうだな」

スニのすぐ隣で同じように倒れるミーノレス。それからウルムシカの縄張りからある程度離れ、しばらく休憩をとってから2人の冒険者は旅を再開した。

「この森、長すぎないか」

森に入りウルムシカの縄張りで死にかけた日から2日、一向に出口のない道を進みながら呟くミーノレス。



「もう少しで出ると思うんだけど」

少し不安そうなスニ。

「噂をすればだ。」

そうしてミーノレスとスニはようやく竜骨の森を抜けた。

と同時に聞こえた飢えた獣の声に立ち止まるミーノレスとスニ。

「オオカミ？」

スニの呟きと2人に襲いかかるオオカミをミーノレスがエクスで退けたのはほぼ同時だった。

「いつ」

今度は鳴き声と共に3羽の緑の鳥が現れミーノレス達をつつきについた。

「あっ」

また何かに叫ぶミーノレス。

それからすぐ鳥達はまるで遊びは終わったとでも言いたげに飛び去った。

「スニ」

ミーノレスの声にスニは突かれた頭や手足を痛がりながらも顔を上げた。

「スニ、大変だ、エクスが、エクスが鳥に取られた」

「へ？」

ミーノレスの言葉にスニはまた青ざめたが、それはウルムシカ達に追い詰められた時ほどではなかった。

#### 4、竜骨の森の白き獣（後書き）

ネタクイズ

ウルムシカの名前の由来は何でしょう？

ヒントは森の名前。

答えは次回。

## 5、盗賊の親子

（怖い事を無理に聞く必要はない。本当の友情のまえでは多少の恐怖なんて関係ない）

「見失った」

必死の追いかけるなしく、エクスを奪った3羽の緑鳥を見失うミーノレス。

「いや、大丈夫」

後からやって来たスニ、その手では本がパラパラとめくれ続けている。

「エクスは師匠せんせいの強力な魔術が宿ってるからね、奪ったのは盗っ人のカンドリの運のツキさ」

「カンドリっていうのが、さっきの」

スニのさりげなく言った緑鳥の名前がひとつ勉強となったミーノレス。

そしてまたしばらくの時間、ミーノレスの知らない言葉で何かを唱えるスニ。

「これがカンドリの飼い主、つまり盗っ人までの地図」

そう言って服の内ポケットからくしゃくしゃの紙を取り出し、広げミーノレスに手渡すスニ。紙にはわりと広めに描かれた辺りの地図が載っていて、1カ所だけ赤く点で塗り潰されていた。

「飼い主？」

「カンドリに物を奪う習性はない、これは間違いないよ、絶対」

ウルムシカの時の知識間違いを返上するかのように強く言うスニ。

「わかった、とりあえずこの点の場所に行こう」

それから2人がそんなに遠くもない赤い点の場所に着いたのはほんの数分後だった。

そこには爆発跡のような大きなくぼみにテントを張って男が1人くつろいでいた。

黒い短髪に悪そうな目つき、右手だけについた赤い小さな盾のような武装。その左隣にはミーノレス達を襲ったオオカミが1匹、左肩にはミーノレスからエクスを奪った1羽のカンドリと、その上でじやれあうように飛び交う2羽のカンドリ。

「もう彼が犯人で間違いないね」

盗つ人男のテントから少し離れた岩影に隠れながら小声で隣のミーノレスに呟くスニ。

「みただけど、何者なんだろう、盗賊？」

「多分」

ミーノレスの問いに少し考えてから呟くスニ。

「何者かって、それを言うならお前達もなんだけどね」

突然の見知らぬ声に振り向くミーノレスとスニ。

そこにいたのは青い肩くらいまでの髪にきりつとした顔立ちの、ミーノレスと同じ歳くらいの少女だった。

「動くなよお前、このお子様魔術師がどうなっても知らないよ」

ミーノレス達が何か言う前に目にも止まらぬ素早さでスニを捕らえ、手に持っていたナイフの先を彼の首に当てる少女。

「お前は？」

歯ぎしりしながらもまだ冷静に尋ねるミーノレス。

「さあね、悪いけどならず者に名乗るような名は持ち合わせていないの」

完全に馬鹿にしたような態度に腹は立つがスニの命がかかっているのでミーノレスはもう言葉は控えた。

「父さん、父さん、妙な奴らを捕まえた」

ほんのしばらく黙るミーノレスに不満そうにした後、気を取り直したようにテントの男に向かって叫ぶ少女。

「ユーリ。お前達は？」

ミーノレス達の近くへ来てすぐに男は言った。

「悪いけど盗つ人に名乗るような名は持っていないんだ」

「あつ」

言いながらちようど一瞬の隙についてユーリと呼ばれた少女の手から逃れるスニ。

「今度はそつちが動くな、動いたら」

「魔術か？ これは怖い」

ニヤリとする男。

「いつ」とミーノレス。

「これは魔術を込められた銃なんだろう、だから取り替えしに来た、違うか？」

そして結局エクスを向けられたミーノレスとスニはそのまま身動きが出来ないままでいつの間にか縄を持っていたユーリに縛られ、完璧に捕えられてしまった。

「で、どうするの？」

仲良く手首を後ろに縛られた状態で小声でスニに尋ねるミーノレス。実はエクスは撃たれても恐怖を感じ、その場から逃げ出してしまうだけの武器なので、そこまでの問題でもなかったのだが、実はスニは小声でミーノレスに「一旦捕まるう」と言っていたのである。そうして2人はすんなり縛られた訳である。

「とりあえずエクスさえ取り戻せばこつちの物だからね、奴らが寝たらこつそり取り戻そう、縄ならもう解いてるから、いつでも動き出す事は出来るよ」

「わかった」

そうして終わる、捕らえられた2人の秘密の作戦会議。

「で、こいつらどうするの？ 父さん、言っておくけどただで逃がすなんて事にしたら、また同業者からラズーはまぬけだって馬鹿にされるよ」

しばらくしてミーノレス達を見下ろす位置で隣の父(？) ラズー(？)に尋ねるユーリ。

「普通なら迷うとこだが魔術師だからな、決まってる」

そう言つてナイフを取り出しユーリに渡すラズー。受け取つたユーリはニヤリとする。

「それじゃ遠慮なく、えー」

「俺はミーノレスだ、人殺し女」

そうして向きを変えユーリの持つたナイフを蹴りはじくミーノレス。「作戦変更だねミーノレス」

言いながらラズーの手をうまくかいくぐり、彼の腰のエクスを取ろうとするスニ。しかししつかりくっついていてエクスはうまく取れず一旦反撃をかわす為離れるスニ。

「これはどうかな」

「うっ」

ラズーの取り出したエクスとは違う銃に少し後ずさるスニ。それは鉛弾の銃ではなく間違いなくエクスと同じ魔術品だった。正直ちよつと安心した。

「お前たちも」

「うっ」

オオカミとカンドリも集まってきたて囲まれるスニ。

「ごめん」

「何が？」

素早く立ち上がり重いつきり右手で殴ろうとしたミーノレスの拳を、腕を掴み止めるユーリ。

「残念ね、かよわくなくて」と腕をはじきストレートに蹴りを放つユーリ。

使つていなかった方の左手でガードはしたが、あまりの威力に軽く飛ばされ、バランスを崩し後ろに倒れるミーノレス。それからも容赦なく倒れるミーノレスを勢いよく足蹴にしようとするユーリの足を転がり、かわして、その勢いそのまま立ち上がるミーノレス。

「確かに正攻法じゃ不利なのはこっちみただけだ」

「もう何も遅い」

ミーノレスの言葉を聞いていないかのようにまた新たなパンチを放とうとするユーリ。

「ざんね」

言葉を思わず止め、必死な横っ飛びのミーノレス。その視線は倒れた時にひそかに拾い、ユーリの拳に当てようとし、確かに当たったのが見事に壊された岩の残骸に向けられていた。

「お、恐ろしいね」

「残念ね優等生、まあこの辺の岩が柔らかかったのもあるんだけど、楽しそうに勝ち誇るユーリ。」

「かわせ、かわせ、弾は無限にあるんだ、お前が疲れるまでいくらでも撃ち続けてやる。」

「ああ、もう」

魔術品の銃をオオカミとカンドリに囲まれ見張られた狭い範囲の中で紙一重でかわし続けるスニ。

もうこれしかない。横目でスニとラズーの様子を確認しながらもユーリの攻撃をかわすミーノレスは強く思う。

それからユーリをほっぽって自分達には背中を向いたラズーへと一直線に走り出すミーノレス。

「父さん、そっちにいった」

叫ぶユーリ

ラズーはユーリには答えず、まるで後ろに目があるかのようにエクスを腰から取りミーノレスに向けて放った。がうまくかわすミーノレス。

なんとか、なんとかやる。

ラズーはそこでミーノレスの方にも一瞬向き、エクスをまた向きをミーノレスに合わせ放った。そしてまた横っ飛びでかわすミーノレス。

一か八か。

かなりかわしにくくなるのは承知でラズーの元へと勢いよく進むミーノレス。ラズーはスニへの攻撃も続けながら今度はミーノレスの方に連発した。

「いつ」

かわせたのは3発目までだった。

エクスを撃たれたミーノレスは一瞬全てが見えなくなった。そして恐怖感、信じられないほどの恐怖感、しかし耐えられないほどではない恐怖感が彼を襲った。

「前に進む」

叫び、その通りラズーの元へ進むミーノレス、何発も撃たれているのがわかったがもう最初の恐怖感以上の影響はなかった。そしてそのまま手を伸ばしラズーの手のエクスの向きを変えラズー自信に当たるミーノレス。

「うわあああ」

叫び声をあげその場から逃げようとするラズー。しかしそれはスニに止められ、エクスの影響が終わる頃には2つの銃は2つ共スニに取られていた。

「くっ」

まだ隙を見て戦おうとするユーリにエクスを取り向けるミーノレス。

「私達を殺すの？」

「殺さない、お前達と一緒にするな」

怒鳴るミーノレス。

「一緒？ 何が一緒よ、このならず者」

怒鳴り返すユーリ。

「なあ」

「何よ」

しばらくの沈黙の後、唐突に素つ頓狂な声を出すミーノレス。

「君、ナイフで何しようとしたの？」

「上着切って隠してる物あったら取るうとしたのよ、ならず者って意外と骨董品持ってたりするし」



またしばらくの沈黙。

「なあスニ？」

「何ミーノレス」

スニもいかにも拍子抜けといった感じだった。

「もしかしてこれは軽いごか「スニ？ 小僧、お前スニっていうのか？」

「う、うん」

ミーノレスを遮るラズーの問いに頷くスニ。

「待つて、ラズー？ そうかあなた師匠せんせいの知り合いの」

そうして争いは終わった。

ラズーはある日、悪い魔術師に騙され仕事を無くし、住んでいた街を追い出されてしまい、仕方のない形で盗賊になったのだが、ネイトレッサとしてもどうせ外に出る人なんて追放されたならず者が、ほとんどがろくでもない奴の魔術師だけだし、ラズーが後悔していないなら別にいいかという感じだったらしい。

ちなみにユーリは盗賊になる前からの義理の娘で、強く生きて欲しいという想いから幼い頃より鍛えまくられた為にあんなに強かったようで、ミーノレス相手にもわりと手加減していたようだった。

「じゃあ僕らはもう行きます。」

「またいつか機会があれば」

一晩休ませてもらった後、ミーノレス達はまた準備をし、旅を再開するとラズー達に告げた。

「ああ、すまなかつたな。それとネイサの奴にもよろしくな」

悪い事をした後の子供のように罰が悪そうなラズー。

「また機会があればね、ミーノレス、スニ」

ラズーとは対称的に意味深な笑顔で楽しそうなユーリ。

「バイバイ」

そしてミーノレスとスニはラズーのテントを後にした。

「ねえミーノレス」

「ん？」

「いややっぱり何でもないよ」

しばらく進んでからのミーノレスとスニの短い会話。

ラズーが撃ったエク스에ミーノレスが当たったように見えたのは気のせい？ もし撃たれてたならなんでミーノレスは前に進めた？ スニは結局その疑問をラズーにもミーノレス本人にも聞けなかった。聞くのはわりと怖かった。

## 5、盗賊の親子（後書き）

前回のクイズの答え。

ウルムシカ＝カルシウム。文字並べ替えただけ。

次はエスネス・エクス由来。

ヒントは英語。

かなり難しいと思う。てゆうかわかる人は結構凄いかも。

## 6、怪物が1匹、1人

(人を人扱いしないなんて失礼です)

「やあラグにセズア、何か用かい？」

家の庭でじっと立っていたネイトレッサは、訪れた2人が何か声をかける前に振り向いた。

「ネイサ、ミーノレスとスニは無事にフェイルトに着けたかしら」

「まだみたいだね、でも心配する事もなさそうだよ、星の動きはいい兆候だ、それに2人とも運がいいしね」

笑顔のネイトレッサ。

「でもまだって、遅くないかな」

「いや、こんな物だと思っよ、外れの道を通る旅は」

それから一旦言葉を切ってから思い付いたような笑顔でネイトレッサは言った。

「ちよつと今の彼らの状況調べてみるかい？」

ミーノレスとスニ、2人が旅だってからもう2週間が経っていた。

「もう大分来てる、多分明日か明後日にはフェイルトに着くと思っ」

休息中、魔術で自分達のかなり大まかな位置を地図に出し確認する

スニ。

「師匠せんせいならもうちよつと正確に出せるのにな」

今度はため息をつくスニ。

「いや、じゅっぶ」

言葉を急に止めエクスを構えながら立ち上がるミーノレス。

「ミーノレ」

いくら魔術の実行中で集中していたのだとしても、さすがにもっと早く気付くべきだった大きな何かの気配にスニも気付いた。

「私、じゃないわよね」

近くの木陰で2人を覗き見ていたユーリの呟き。

こっそり2人の後をつけてもう随分経つのに今更気付かれるのもおかしい。1人うんうんとユーリは頷いた。とうがかさすがに自分の気配を消すのに集中していたユーリもさすがに気付いている。ミーノレスとスニに迫る大きな気配に。

「消えた？」とスニ。

そう確かに消えた、気配は完全に消えた。でもこれは。

「ミーノレス、後ろ」

立ち上がり叫ぶユーリ。

「いいっ」

すぐに振り返り、目の前まで迫っていたウルムシカの倍は大きい金色の、四足で逆立った毛をした、鳥のクチバシのような口を持つ、赤い目の怪物にとっさにエクスを放つミーノレス。怪物は少しその場でこらえようとしたが結局逃げ去って行った。

「ユーリ」

「ミーノレス、話は後よ」

2人の所に駆け寄るユーリ。

「うん、狙いが何かわからないけど多分またさっきの奴は来るよ」

そしてローブから1冊の薄く小さな本を取り出すスニ。

「また気配」

「今度は消えるのが早い」

背中合わせのミーノレスとスニ。

「今度はあっち」

ユーリの指差した方向にちょうど現れる怪物に、ミーノレスはまたエクスを撃って逃げ出させた。さっきと同じく怪物はその場に踏み止まろうとしたが、さっきと同じく結局逃げ去った。

「まさか」

呟くスニ。

「スニ？」とミーノレス。

「エクスは魔法を克服しようとしてる」

スニは本当に信じられないという顔だった。

「大きな魔力、外の魔法師がこれほどの魔力を持つ時代とはね」  
自作の世界地図のフェイルトの近く、つまりちょうどミーノレス達  
が怪物に襲われている辺りの地点に指を当て、呟くネイトレッサ。

「魔法師？」とセズア。

「今、ミーノレスとスニは魔法師に襲われてる」

地図に指を当てたまま目を閉じ、呟くネイトレッサ

「なぜ？ 大丈夫そう？」

慌てて尋ねるラグ。

「わからない、けどそれほど強い悪意は感じない、最悪でも殺され  
はしなと思う」

目を開け、地図から指を離し、急に動揺した様子になるネイトレッ  
サ。

「スニ、ミーノレス」

遠く2人の家族を想うセズア。

「あれ、なんて生物なんだ？」

怪物から逃れるため、偶然見つけた大木の洞穴に隠れてから数分、  
洞穴のすぐ手前で身構えているような怪物を見ながら呟くミーノレ  
ス。

「僕も知らない、ただ多分エクスが魔法武器だと理解しているよう  
だから、おそらく魔法師に使役されてるんだよ。それにあんなでか  
いの僕が知らないって事は多分あれは地上の生物じゃない」

「召喚術？」

割り込むユーリの言葉に頷くスニ。

「ここを見つけれないみたいだ」

ミーノレスの言葉にスニは何も言わず、ただどうだろうという感じで首を振った。

「ここは見つけられないわ」

「今度は何？」

「ミーノレスじゃないの？」

「俺はこんな高い声出せないぞ」

唐突に洞穴に響いた謎の声にそれぞれ反応するユーリ、スニ、ミーノレス。

「私はあなた達の命の恩人です」

再び響く声、小さく無邪気な女の子のような声。

「この大木はまさか」

それに手を触れ呟くスニ。

「おかしい、何がどうなってる」

地図のミーノレス達の地点に今度は人の手の指ほどの大きさの黒装束人形を置き、それに指を当てたネイトレッサ。

「ミーノレス達」

「絶対大丈夫だ、ミーノレス達が遭遇している魔術師には一種の友愛さえ感じる。というか間違ってた。彼らは襲われていない、少なくとも魔術師には」

不安そうなラグに早口のネイトレッサ。

「一体全体どういう事なの？」

セズアの疑問の呟き。

「わからない、ただ」

一旦言葉を止めるネイトレッサ。

「ただ？」とラグ。

「やはり星の兆候は悪くない」

「木が喋ってるの？」

微妙に信じられないミーノレス。

「正確には多分木じゃない」

「ええ、私は木じゃないわ」

ス二の言葉に頷くように答える大木。

「呪い？」とユーリ。

「ええ、そうよ」

答える大木

「自分で自分に？」

「なぜそう思うの？」

ス二の問いに問いで返す大木。

「俺達を助けてくれた」

ミーノレスも呪いで姿を変えている人、正確には変えられた人はそのほとんどが禁忌を侵した悪人だと知っている。もし悪人でない人がそうなっていたなら、それは自分で自分に呪いをかけた魔術師の可能性が最も高いのである。

「理由はあの怪物から身を守る為じゃないですか？」

外でじつと待機する怪物を指差し、尋ねるス二。

「正解よ、あれは天界の獣で、魔術師夫婦だった私の両親が使役していたんだけど10年くらい前に悪い人達に騙されてちよつとね」  
大木の言葉に少し口を閉ざすミーノレス達3人。

「私は両親の事誇りに思ってるわ。だってもう2度と私達を騙した人達が悪事を働けないように、命を捨ててまで彼らの力を奪ったんだから」

「でもそれで獣との使役の契約が解け、しかも強力すぎて天界に戻す事も出来ず、こうなっただって訳ですね」

言いながらもロープのふところからとても小さな、ての平くらいの大きさの石の短剣を取り出すス二。

「今のあなたならあの怪物を帰す事が出来る。違いますか？」

ニヤリとするス二に、ミーノレスとユーリも向き合いニヤリとした。「それで正解。10年自然と一体でいて高まった私の魔力ならきつ



とやれるわ」

「あなたの膨大な感情と力に呪いは弱まってる、僕があなたの呪いを解く」

そして石の剣を地面に突き刺すスニ。

「自然と一体でいれば魔力が高まるなら、魔術師はなぜみんな」

「普通は木のまま10年も意志を保てない、そんな修業は危険すぎて誰もやらないよ」

ミーノレスが言い切る前に彼の質問に答えるスニ。

「どの道僕らの選択肢はこれだけだよ、この人、凄いよきつと」

こらえきれないといった笑顔で石の剣に念を込めるスニ。

「フラット」

スニがそう言った瞬間、石の剣は粉々に砕け、そこから白い光がミーノレス達全員を大木ごと包んだ。

「ス、スニ、ミーノレス」

「俺はここ」

大木の消え去った場所でユーリの呟きに答えるミーノレス。

「スニ」

後ろに倒れていたスニに気付き叫ぶミーノレス。

「大丈夫よ、疲れて寝てるだけ」

大木の声だった。ただし発信人は背の小さな黒と赤のチェック柄ジヤケットを纏ったポニーテールの黒髪少女。

「まだ幼い、魔術師としては未熟、よくやるわ。それとあれは帰したからもうここは安全よ」

「あなたは大木だった魔術師？」

尋ねるユーリに笑顔を見せる少女な見た目のかわいらしい魔術師。

「ええ、あなた達には本当に心の底から感謝するわ」

「危険は去ったみたい、やっぱり彼らは運がいい、心強い味方を得た、もうフェイルトまでの旅は安心だよ」

ナイトレッサの言葉にラグもセズアも心からホツとした。

「一度もだ、我々への警戒の監視を遠くの者を見ながら1秒たりともやめない」

「恐ろしいですよ、本当にあれは怪物だ、悪魔が言うんだ、間違いないですね」

ファイロの城の一室、いらついた様子で呟くファイロと対称的に冷静な感じの青年姿のグラーシャラボラス。

「ネイトレッサ、あいつが、いやあいつだけだ、やはりあいつだけが我々の前の壁」

「まったくだ、今のネイトレッサはあの女すら越えているかも知れない」

グラーシャラボラスのその言葉に少し笑みを見せるファイロ。

「エズエラ、か、そうだな、今のネイトレッサはまさにあの人だ。」

そうになるとやはり奴は怪物と言えるな。くくく」

それからただ声を上げ高笑いするファイロ。グラーシャラボラスは無表情のまま、ただ少しだけ口を歪ませた。

6、怪物が1匹、1人（後書き）

前回の答え

エスネス・エクス||e s n e s X || X s e n s e ||エツクスセ  
ンス

意味わかりませんね。

クイズおやすみ。

## 7、人それぞれの神

(賭け事禁止!!!)

「こつちこそありがとう、だよね？」

ぎこちない言い方のミーノレス。

「ふふ、なかなか面白い反応ね」

悪戯な笑顔の少女魔術師。

「え」と

「アイよ、私は、人としてはね、だからそう呼んで、あなた達は？  
あなたはミーノレスよね？」

困ったようなスニに微笑みかけるアイと名乗った少女、そして指差され頷くミーノレス。

「私はユーリ、彼らの旅の仲間よ、ね、ミーノレス」

旅の仲間をひどく強調するユーリ。ミーノレスもスニも軽く苦笑いを浮かべながらも特に何も突っ込んだりはしなかった。

「僕はスニ、えと、一応魔術師ネイトレッサの弟子です」

「ネイトレッサ？ネイトレッサ・ミューオン？」

ある意味予想通りの驚き具合のアイ。

「まあかなりの見習いですけど」

「ちよつと事情を聞かせてもらえる？よかつたらだけど」

恐縮気味のスニに興奮覚めやらぬ感じのアイ。

それからここまでのいきさつを説明するミーノレス達。

ネイトレッサとファイロ、ミーノレスとスニの旅立ち、ユーリとの  
出会い。

「なるほど、なるほど」

話を聞き始めた時よりはずいぶん落ち着いた様子のアイ。

「ファイロか、話に聞いた通り凄く性格悪いわね」

「まさにさ、あいつは魔術師としてどうこう以前に人としてクズさ」

お互いの言葉にお互いに笑みを浮かべるアイとミーノレス。

「よし決めたわ、助けてくれたお礼よ、私も出来る限りあなた達の手助けをするわ」

どんと手で胸を叩くアイ。

「アイさん」

スニの呟き。

ミーノレス達はアイの言葉に心から感謝し、そして頼もしさを感じた。

「これは手厳しいね」

今やかなり離れたデイスキアで苦笑いするネイトレッサ。

「何が？」

素っ頓狂なラグ。

「見事に監視を断たれたよ、やるねアイ」

「アイって？例の魔術師？」

楽しそうなネイトレッサにぼつりぼつりと尋ねるセズア。

「ああ、あまりいい趣味じゃないとき、そうゆう意識を送って来た」  
言いながらその魔術道具を片付け始めるネイトレッサ。

「でもそれって大丈夫？そのアイって魔術師は」

「信頼出来るさ、彼女は珍しく完全に白の魔術師だ、つまりは彼女は悪魔の力を一切必要としない、自然の加護を受けた存在なんだ。

わかりやすくいうと僕ら魔術師よりむしろ彼女は君ら普通の人に近い、人は人を信頼するものだよ、今は少なくとも」

ラグを遮り、疑問には少し意味深な言葉を交えて答えるネイトレッサ。

「フェイルトまでは数キロよ、より正確には4キロくらいかな」

先頭を歩くアイの言葉に疲れきった顔を辞めて笑顔となるミーノレス達。

「ずいぶん早いですね」

「この道はかなりの近道だから、まあ問題もあるけどね、ここで止まって」

そしてアイの言葉の終わりと共にピタリと止まる一行。

「何かあるの？ここ」

「気配がするわね、ただ人じゃなく何か、何かいびつな」

言いながら身構えるミーノレスとユーリ。

「来るわよ、蛙は平気？」

「へ？」

アイの問いに目に見えて肩を震わすミーノレス。

「まあ大丈夫よ、私がついてる、フィカッタ」

アイの言葉とほぼ同時に一斉に彼らに飛びついて来た大量の蛙を、上げた両手の平から光の炎を浴びせふんぞり返させるアイ。そして次の瞬間次々とパンクするように爆発しだした蛙達にミーノレスだけでなくスニもユーリもギョツとした。

「こ、ここまでする必要はなかったんじゃないの？」

「ええ、ちよつと殺しすぎだと思っわよ」

静まり返った場に再び言葉を発生させるミーノレスとユーリ。

「罪人の魂」

スニの呟きにニヤリとするアイ。

「ええ、今の蛙達は本当は蛙じゃなくて人よ、それも極悪人、悪い事しすぎて死ぬ事さえ許されず見せかけだけの命となった哀れな存在達よ」

少し悲しげな感じでもあるアイ。

「じゃあアイは彼らを助けてあげたって事？」

「遠からずも近からずだな、理由の半分くらいは私と会う為だろう」ユーリの問いに答えたのはアイでもスニでもなく、いつの間にか近くの湖に平然と立っていた長身に長い金髪に全身真っ黄色な服の男だった。

「いいえ全部よ、彼らみたい最低な悪人達なんて心底どうでもいいわ」

それが本心かどうなのか全然アイの態度からはわからなかったが、少なくとも湖の男はそう思っていないなさそうだという印象をミーノレスは受けた。

「ところで他の皆さん方とは面識もないので自己紹介しておきましょう。私の名はイーサン」

「僕はスニ」

「私はユーリ」

「俺はミーノレス」

順に名前だけの自己紹介をする三人。

「お前は魔術師だなスニ、わかるぞ凄く、お前の中に眠りし魔力が言いながら不気味な笑みを浮かべるイーサン。

「あなたも魔術師？」

ただならぬ雰囲気のエーサンにあっけらかんと尋ねるユーリ。

「違う、俺は宿りし者さ、この悪党蛙の住み着き沼を支配している」

「宿りし者？」

また知らない言葉に頭をひねるミーノレス。

「宿りし者とはその名の通り、何かと共に生きている者よ、呪いのような物だけど呪いじゃなくて定め」

「そう生き長らえ、待つのは死ではなく与えられし使命の終わり、それが俺達だ」

アイが始めイーサンが終わらした説明に興味深そうに首を振って納得する魔術師ではないミーノレスとユーリ。

「でも普通宿りし者は姿を見せない、というより姿を見せられないはず、特に魔術師の前では」  
スニが発生させる新たな疑問。

「単純な事さ、宿りし者は神の作りだした法則に、魔術師はもちろん普通の人や草木、動物達よりも逆らえない、だがその法則には穴がある」

今回はスニもイーサンの言っている事がよくわかっていなさそうだった。

「神を変える、本当の神とは違う何かを神だと心から思い込む」

「賢い事はよき事ね」

言おうとした事を先にユーリに言われ、少し嬉しそうなアイ。

「今は神を忘れているからな、病気なんだ俺は、記憶のな、つまり欠陥品だがその事は感謝している、こうして魔術師と話せるからな」

「本当の神を忘れた以上彼は自分にとっての神の定義を自分で考えられる。彼にとっては苦しみ続ける悪人達の魂を救う者こそ神だという事よ」

そうしてニヤリとするイーサンとアイ、しかし実の所ミノレスにはまだよく意味がわかっていなかった。ミノレスだけが。

「まあ時間がないから本題に入るわ、イーサン、事情は」

「これでも宿りし者として最低限の能力はあるさ、この沼に近づいた時点で君らの思想、求めている物は読めてる」

それからミノレスに近づき彼の頭に手を置くイーサン。そのただならぬ雰囲気押し黙る一行。

「賭けてみるのはアリだな」

しばらくしてからそう言って手を離すイーサン。

「ふーん」

「意外、いや残念そうだねアイ」

不満そうなアイをからかうように言うイーサン。

「一体どういう事ですか？」

魔術師の卵のスニもこの会話の意味がわからないようで頭をひねっていた。

「まあもう関係ないし白状するわ、私は彼にあなたをテストしてもらったの、古の呪いに耐えられるのかどうかを」

がっかりしているのをまったく隠そうともしないアイ。

「俺は合格？」

「合格だが浮かれた気分になるのは違うよ、君はある程度普通よりも精神力があるというだけだ。古の呪いに耐えられる可能性があるだけの事、今でも十中八九命はないさ」



イーサンの警告とも取れる言葉にゴクリと息を呑むミーノレス。

「そうよミーノレス、今でもあなたは十中八九死ぬ、それでも」

「行くさ、少しでも可能性があるなら」

強く言うミーノレスに深々とため息をつくアイ。

「しょうがない、もう嘘や試しはなし、王の剣までは必ず連れて行ってあげるわ。ありがとうイーサン」

「いいさ、それじゃ俺はもう」

そして何もなかったかのようにその場から完璧に消え去るイーサン。

「本当バカねあなた」

呟いたのはユーリだった。

そして一行は再びフェイルトへの道を進み始めた。

「イーサン」

「ああ、いたのか、久しぶりだなケアル」

同じ宿りし者、その中でも最も自由な存在大気に宿りし者ケアル。

「神の記憶がなくてもあの子の事はわかるだろ」

ケアルの言葉に無言で頷くイーサン。

「お前なら止められた」

また無言の頷きを返すイーサン。

「お前は神が、いやいい」

そして言葉を止め、立ち去ろうとするケアル。

「ケアル、言ったの聞いてたろ？」

そして振り返るケアルに笑顔で楽しそうに叫ぶようにイーサンは続けた。

「賭けてみるのもいい」

## 8、白銀の呪い

(死ぬ時に死なない。不思議な幸運ですね)

「やっと、着いた」

フェイルトに着き、まず1番始めに呟くミーノレス。半分指名手配犯の彼にならず者のようなユーリがいたがあっさり入国出来たのはアイのおかげだろう。

「あれが紅き塔？」

大都会であるディスクアに比べると大きな建物もあまりない中、街外れに見える異様に目立つ焼け焦げたような大きな炭色の塔を指差すミーノレス。

「ええそうよ」

頷くアイ。

「街の人に聞くまでもなかった。さあ早く行こう」

「まあそこまで急ぐ事もないでしょミーノレス」

やや駆け足気味で塔に向かおうとしたミーノレスを止めるユーリ。

「ここは観光するような所じゃないし」

「ミーノレスのお母さんと妹さんはここに住んでるんだ」

スニの言葉にああと納得するその事を知らなかった2人。

「じゃいい機会じゃない、二人と仲直りしたら。本当に最後かも知れないんだし」

最後は少し拗ねたような言い方になるユーリ。

「俺は」

そして黙り込むミーノレス。情けないその姿に他の面々は呆れるしかなかった。

「別にいい、行こう」

決心したといったミーノレスのその言葉と表情に、もう仲間達は何も言わず彼に続いた。

「ところで罨とかはあるのかな？」

「大丈夫だと思うわ、昔はあったかも知れないけど、この塔はもう何千年も昔の建物なのよ」

塔の巨大な門前、今になって不安そうなミーノレスと今もまだ不満そうなアイ。

そしてそれから会話をする事もなく無言で塔の螺旋階段を上がって行く一行。

そして最上階の部屋、三体の剣士の銅像に守られるように安置された錆びた剣の前で再び足を止める一行。

「これが塔の王の剣」

ミーノレスの言葉に頷くスニとアイ。

「ミーノレス」

「死なないでよ」

自分の事のように心配してくれている三人に笑顔だけを向けて、そして剣に向き直り、その柄を手取るミーノレス。

悲鳴はあげなかった。ただ凄まじい恐怖、憎しみ、悲しみをミーノレスは感じた。

気づくとミーノレスは剣を握る感覚も失い、ただ存在だけの存在となり真っ白な世界にいた。

「違う、俺は」

「俺は生きてる」

気がつくともミーノレスが叫んでいたのは白い世界ではなく紅き塔の最上階だった。その手の感覚もちゃんとあり彼はまだ剣を握ったままだった。

「みんな」

振り向くとその場で立っていたのは自分の他に放心状態のようなアイだけだった。

「スニ、ユーリ。アイ、二人は？」

「大丈夫、気を失ってるだけ、ミーノレス、いや今は事情を説明してる時間も惜しいわ、スニをお願い」

そうして急に目が覚めたように早口で喋り切ると、小柄な体のどこにそんな力があるのか気を失っているユーリを背中に抱えるアイ。

「今は私を信じて続いて」

アイのこれまでとは明らかに違いすぎる切羽詰まった雰囲気は頷くスニを背負ったミーノレス。

「飛び降りて、早く」

そう言っただけで部屋を出てすぐ螺旋階段を全て無視して飛び降りるアイ、ミーノレスもびびりながらもとにかく言う通り飛び降りた。

「シクン」

地面に当たる瞬間叫ぶアイ。するとアイもミーノレスも少しジャンプした時の衝撃がなくて、拍子抜けするほどあっさり着地出来た。

「行くわよ」

そしてすぐに塔を出るそれぞれ仲間を抱えた2人。

「いいミーノレス、人が見えたらエクスを撃って、敵とか味方とか知り合いとかどうでもいいから」

「わかった」

もうひとまず何も疑問を持たず、アイを信じるミーノレス。

「クタミクヤ」

そう言うのと地面の土が次々浮き上がり固まりだした。

そしてそれに見とれる間もなくフェイルトの方からこちらに素早く近づいてくる人が見えたのでエクスを連発するミーノレス。

「駄目、当たらない」

「クラスト」

一瞬だった。アイが振り向き近づく何者かへと手の平を向けてそう唱えた瞬間、その人物は腹に穴を上げ血しぶきと共に吹き飛んだ。

そして土が馬車の形を形作ったのはそれとほぼ同時だった。

「後ろの席にスニを」

言われた通り彼を馬車の後ろの席、すでにユーリが座らされていた

隣に座らせるミーノレス。

「うわ」

そしてミーノレスとアイが前席に腰掛けた瞬間凄まじいスピードで走り出す土馬車。

「ミーノレス、全ての事情を説明するわ、これは想像しうる中でも最悪のシナリオかも知れないわ」

アイのアイ自身のひどく怯えた様子に息を呑むミーノレス。

「ネイサ」

何やら屋敷の庭で儀式の為の巨大な円を描いている、腰の右にそれぞれ鉄、木、金と3つの素材で出来た銃、左にはやたら奇妙な模様の鞘に収まった短剣を下げた大魔術師の友人に驚くラグ。

「ラグ、事態は大きく変わった、僕はミーノレスの元へ行く」

「い、いったい何があったの？」

まったく状況がわからないラグ。

「ミーノレスが王の、白銀の呪いに耐えたんだ、そうゆう呪いに、そしてあれほど強烈な呪いだ、発動したのは世界中の魔術師達に気づかれてる」

言いながら円を描く作業は辞めないネイトレッサ。

「ま、待って、それってどうゆう事？」

「白銀の呪いに耐えれた者なんて歴史上存在しない、それを浴びた者は永遠を白き闇の中でさまよい続ける悪夢の呪いだ。人だけじゃない、魔術師にだってそれを耐えられる者なんていない。だがミーノレスは耐えた」

そこまでで円を描き終えるネイトレッサ。

「アーミ」

ネイトレッサがそう唱えるといつの間にか円の上には大体5、6メートルくらいの全長の戦車があった。ガラスでコックピット内部が丸見えの戦車。

「ミーノレスは世界中の魔術師に狙われる、人によっては実験道具

として、研究対象として、危険因子として」

そして戦車に乗り込むネイトレッサ。

「ミーノレスを」

「僕は彼を助ける、彼が何者だって僕らはもう友達だ」

「俺も友達だ」

叫ぶラグにニヤリとするネイトレッサ。

「これの定員は2人までだから他のついて来そうな人達には内緒だぜ」

ネイトレッサの言葉に笑顔で返し戦車の彼の隣に乗り込むラグ。

「急ごう、どうやらファイロも旅立ったようだ、ミーノレスの命を

あんな奴に奪われる訳にはいかない」

「うん」

そして戦車は空へと浮き上がりその場を速く飛び去った。

## 8、白銀の呪い（後書き）

第一部完って感じます

## 9、恐ろしきもの

(火を吐く動物な〜んだ?)

「でも世界中の魔術師に狙われるって、それ俺もう駄目なんじゃ」  
「大丈夫、あなたにはあのネイトレッサがついてるのよ、おそらく彼ならもうあなたの探索を開始しているはず」  
「ミノレスを遮りながらも馬車を精一杯走らせるアイ。」

「これはネイサの所に向かっているの？」  
「はっとして尋ねるミノレス。」

「いいえ、今私達の辿った道に戻る訳にはいかないわ、あの付近には強力な魔術師も多いし、それにイーサンが気がかりだわ」

「イーサン、なぜ彼？」

「あなた自分が何者か、なぜあんな強力な呪いに耐えられたのかわかる？」

「わかんない、ちっとも」

言葉通り、ミノレスには自分が助かった理由がまったく全然わからなかった。

「そうでしょうね、でもあなたには何かあるのよ、普通ではない何かが、そしてそれが何にせよ、おそらくイーサンならそれに気づけたはず」

「でも彼は」

イーサンとのやりとりを必死に思い出すミノレス。

「ええ、何も言わなかったわ、今の状況、私達は彼を信じる訳にはいかない、警戒しない訳にはいかないのよ」

怒っているようにも悲しそうにも見えるアイの横顔。

「でもじゃあどこへ？」

新たに疑問を湧かせるミノレス。

「魔物の森よ」



「かなり危なそうなのはなぜ？」

「少少だけ本当にそうかをちゃんと考えてから尋ねるミーノレス。」

「大丈夫、名前は確かに物騒だけど安全な所よ、私やあなたのような存在にはね」

「よくわからなかったがとりあえず安全らしいとはちゃんとわかった。」

「ネイサが来るまでそこに？」

「ええ」

今度は笑顔で頷くアイ。

「ネイサはそこが？」

「わかるわ、彼なら私の事だつてとつくにわかっているし、どうゆう判断をするかだつて読めるはず」

アイの言葉にミーノレスは改めてネイサの凄さを実感した。

「うあつ」

突然ピタリと停止する戦車に驚くラグ。

「どうしたの？」

「ファイロ、いやグラーシヤラボラス」

「ネイ」

ネイトレッサの怒りのはつきり表れた横顔にラグは思わず言葉を失った。

「ここにいれば安全だ、じっとしてろ、声も出すな」

そしてラグを置いて戦車を出るネイトレッサ。

「時々思うんですが今改めて思いますよ、ネイトレッサ、あなたはなぜファイロのように悪魔を、いえ魔術を使ったがらないのか」

いつの間にかネイトレッサのすぐ後ろに立っている青年姿のグラーシヤラボラス。

「最初はファイロと同じ、いやその他全ての魔術師かな、それらと同じなのが嫌なんだと思ってましたが違いましたね、あなたは」

「そこまで告げたグラーシヤラボラスに唐突に振り返り、短剣を彼に向けるネイトレッサ。」

「レミサ」

瞬間ナイトレッサの短剣はその場を覆い尽くすほど分裂し、宙を舞い、そして凄まじくうまく他のそれとはぶつかる事なくグラーシャラポラスの体を血が飛び散る隙間もないほど切り刻んだ。そして倒れる事はなく消え去るグラーシャラポラス。

「先を急ごう」

「殺したの？」

何事もなかったかのように戦車を再び発進させるナイトレッサに呆然と尋ねるラグ。

「悪魔はあのくらいじゃ死なない、ただもうしばらく邪魔は出来ないだろうね」

「目的は邪魔」

「というより時間稼ぎさ、今でもファイロにとっては大した時間だ」

初めて見る本当に焦っている様子のナイトレッサにラグはひどく不安を募らせた。

魔物の森は一般的にはあまり知られていない。強力な結界に覆われたその土地は魔術師でないと存在自体に気づけないからである。

「昔は…」

昔は穏やかで、静かな森と呼ばれていたが、ある日一匹のドラゴンが突如として表れ森を含む近隣の村々などを全て焼き払ってしまったのだった。

「でも…」

ドラゴンは強力な力を持っているが、それ故に普通は何事にも関わらなかった。この事件の裏に何かがあったのは確かだがそれが何かはわかっていない。

「それはもう問題ではないわ、問題はその後…」

ドラゴンが焼き払った不毛の土地には本来生まれる事もない増大な恨みや憎しみが溢れかえり、またドラゴンも天罰か、裏で手を引い

ていた何者かの仕業か、突如激しい雷撃に襲われその場に墮ちた。ドラゴンの遺体から溢れ出た膨大な魔力は憎しみも恨みも全て浄化され、その血を飲み、未だ尽きぬ魔力を、長い年月をかけ取り込んだ不毛の大地に微かに芽生えていた少ない命達はやがて、これまで世界にいたどんな生物とも違う新たな存在となった。

「その生物達」

「大丈夫なのよ、白の私のように闇の力を使わない魔術師は彼らにとってには友なのよ、人の中で最も自然の生物という認識」

ミーノレスに微笑むアイ。

「着いたわ、ここが今私達にとっては世界で一番安全な場所よ」  
目の前の広大な森を前に馬車を止めるアイ。

「僕は大丈夫かな」

「あなたは私より大丈夫かも知れないわ、ネイトレッサの何年か分の加護がついてる」

いつの間にか目覚めていたスニにも振り返り微笑むアイ。  
それからユーリを起こして、事情を話し、森へと入って行く一行。

「魔物なんていないと思うの私だけ」

しばらくしてユーリが確信を付きドキリとして立ち止まる一行。

「どうなってるのかわからないわ、でも」

「出た方がいい？」

ミーノレスの言葉に頷くアイ。

「ちよっ「リルド」

突然何か気づいたスニを遮り、そう言っただけの間にか持っていた木の棒を地面に勢いよく突き刺すアイ。

するとミーノレス達の立っていた地面は素早く地面に沈んで行き、上を土が覆い彼らのいる場所はあるという間に地下になった。

「どうし」

今度はユーリが地上から聞こえる凄まじい轟音に言葉を止める。

「アイ、何があったの？」

「ドラゴン」

ミーノレスの質問にアイが答える前にぼそりと呟くスニ。

「違う、もっとずっと恐ろしい存在よ」

かつてないほど緊張した面持ちのアイ。

「恐ろしい存在？何なの？」

ミーノレスの質問にアイは少し落ち着きを取り戻すように軽く深呼吸をしてから答えた。

「天使よ」

## 10、カメとクマ

(失敗は誰にでもある)

「天使？そんなバカな」

「神の使い？」

心底驚いた様子のスニと素っ頓狂なミーノレス。

「神様つてでも悪い存在じゃないはずでしょ、確か」

ユーリの言葉にミーノレスもうんうんと頷く。

「本当の所はわからないわ、でも上からは悪意を感じるわね、悪魔のそれとは比べ物にならないくらいいのね」

「でも、そんな事現実な訳ない、神話でも妄想でもないのに、こんな」

さらに動揺を増すスニ。

「現実は今私達のすぐ上に恐ろしいまでの負の感情を抱えた天使が降り立ったって事よ、スニ、あなたにももうわかるでしょう」

今や叫ぶように言いながら再び持っていた木の棒を地下のさらに地面に突き刺すアイ。

「みんなじつとしてて、スニ、あなたも、絶対に何もせず、言わず、その場にじつとしてなさい」

ミーノレス達がアイの言葉に頷いた瞬間だった。その瞬間ミーノレス達のいた地下上の地面は剥がれ、彼らに火でも水でも雷でもない、ただ黒い炎らしき何か彼らに、その場の何もかも包み込むほどに降り注いだ。

「何かあった？」

突然戦車を止めるナイトレッサに不安そうなラゲ。

「ミーノレス達の行方が完全に途切れた」

「それ、どういう事？」

ラグの問いにミーノレスは少しの沈黙の後に答えた。

「理由は2つ考えられる。何者かの魔術による物か、ただしもしそうならこれはミーノレス達を助けてくれた白魔術師ではないだろうね、僕が敵じゃないのはわかっているはず。もう1つは、これはあまり考えられないし、考えたくもないが何らかの罰を受けた場合だ」

「罰？」とラグ。

「天界の者が地上の者に下せる力だ。これまでのどんな暴君王が考えだした拷問よりも、どんな復讐者が行った制裁よりも、魔術師が使うどんな魔術よりも恐ろしい力だ。」

ミーノレスの言葉にゴクリと息を呑むラグ。

「ん？」

しばらく眠っていたらしいミーノレスは目覚める。

辺りを見渡し、自分のいるのが見知らぬ巨大な鳥の巢のような場所だという事と、さっきまでの自分のように倒れているラグ達3人にすぐ気づくミーノレス。

「みんな、スニ、ユーリ、アイ、大丈夫か？」

三人共死んではないようだだったが軽く揺らしても起きる事はなかった。

「恐ろしい回復力だが、それはさすがに君だけだミーノレス」

自分を知っているような何者かの声に振り返るミーノレス。

そこにいたのは巨大なカメのような生物だった。

「あ、あなたは？」

「名前に意味はない、むしろ弱点となる、私やお前のように魔術師に狙われる者にとってはな」

「つまり名前はないって事？」

ミーノレスの言葉にこくりとわかりづらく頷くカメらしき生物。

「なんて呼べば？」

少しの沈黙を破るミーノレスの新たな質問。

「好きなように呼んでいい、みんなそうする」

「じゃあカメさん、みんなって？」

カメらしき生物改めカメに口を開く度に浴びせられるミーノレスの質問。

「この森の仲間達さ、外の者達が魔物と呼ぶ」

カメは言葉の旅にまたわかりづらい笑顔で、質問に答えるのが楽しいようだった。

「じゃあいなかったのはなぜ？アイもおかしそうにしてたけど」

「隠れてたのさ、ここに、私達の群れはな、この森の生物は全て群れを作っている、人間達の集落のようなだな。他の群れもおそらくどこかに隠れているのだろう」

「何かあったの？」

またしばらくの沈黙。

「天使？」

「アイが言ったのか、確かに彼女なら感じとれるだろう、ならば隠す事もないな」

急に早口で喋り出すカメに少しミーノレスは戸惑った。

「その名を私達は口に出来ないから説明をどうしようかと困ってたんだ」

「なぜ口に出来ないの？」

「恐怖さ、私達は本能からその存在を恐れている、そしてその名に怒りを感じている、それらは奴らに最も見つけやすい感情なのだ」  
落ち込んでいるように、悲しそうに言うカメ。

「俺達の名前」

「アイはこの森の至る所に自分達の事を伝えるメッセージを送っていた。私達が偶然その1つを拾ったのだ」

と話に割り込んできたいつかの獣に似ているがよく見るとそうでもないクマのような生物。

「あなたは、クマ？」

「その呼び方で結構」

気にいつてくれたのかクマがニヤリとしたようにミーノレスには見えた。

「でもじゃあ俺達を助けてくれたのはあなた達なんですか？」

「いや、天使の罰から助ける術など私達は知らないよ、つまり君達は見逃されたのだ、あの罰はうまく言えないが、カラだった」

そう答えたカメ自身、その事について不可思議に思っているようだった。

「適切な表現よ、あれはまさにそんな感じだったわ」

いつの間にか起きてミーノレスのすぐ隣に立っていたアイ。

「君はどう考える？」

アイに向けてそう訪ねたのは新たに現れた、後でリスと名付けられるであろう生物だった。

「さあ考えられるのはあの天使は望まざるして地上に墜ちてしまい、そして乱心なされ罰を何かにぶつけようとした、だけど寸前のところで正気に戻って罰を無効化させた」

「でもそんな事がまさかな、天界では今天使達の戦争でも起きてるのだろうか」

「天界？」

クマの言葉に頭をひねる、さつきから話に全然ついていけないミーノレス。

アイはそんな彼に少し力なく笑った。

「それでミーノレス達の居場所が？」

「ああ」

戦車に乗ったままのラグからの質問に頷きながらもその場の地面に短剣で魔法陣を描き、指を空間に文字を書くように意味不明に動かしているネイトレッサ。

「準備は整ったが今回の問題はここからさ」

そして真剣な表現となり短剣を強く握りしめるネイトレッサ。

「いつから気づいていた？」



「さつき来たばかりの奴が吐くセリフじゃないぜ」

どこからか、すつと姿を表したファイロに一切の笑みも見せずと言葉を返すミーノレス。

ファイロの格好はほとんどミーノレスとそっくりな物となっていたが持っていた武器は短剣も銃でもなくブーメランだった。彼の体の三分の一くらいの大サイズのブーメラン。

「それはそうだ」

どこか楽しそうにも、微妙に真剣にも思える、何にせよ何か物理的に暗いファイロの表情。

「ラグ、君はグラーシャラボラスの時と同じでそこから動かず、何も喋らずにしている」

ナイトレッサの言葉に無言で頷くラグ。

「お前が死んだ時の事はいいのか？」

挑発するようなファイロ。

「僕は時々思ってた、なぜエズエラ師匠は何の欠点もないのか、なぜ彼女は人でありながら人のような失敗を犯さないのか、犯す所は見れないのか」

唐突に静かに呟き始めるナイトレッサ。

「でも今、はつきりと思うよ、ファイロ、お前が彼女のミスなんだって」

そしてナイトレッサは短剣をファイロに向け、ファイロもブーメランを投げる構えにはならず、ナイトレッサに向けた。

## 11、異なる者

(覚めない悪夢はきつとない)

この世界に神と呼ばれる存在はいる、それはこの世の全てを裏で操り人形のごとく操る者ではなく、この世界の生物達を作り出した者である。

神はこの世界ではなく天界と言われる世界にいる。天界とは簡単に言えば地上と呼ばれるこの世界の意識の裏側の世界であり、神が地上を見渡す為に創られた世界だ。

天界にいる生物は神自身の他に天使と呼ばれる生物のみであり、地上の何かが天界に現れたという記録は、少なくとも地上にはない。

「本当に信じられないわね」

「いったい全体どうゆう事なの？」

出来る限りの方法で今世界に起きてる事態を調べると言い残ししばらくどこかに出かけていたアイにすぐ尋ねるユーリ。

「みんな目覚めてるならちようどいいわ、三人共ついて来て」

アイの言葉にミーノレス、ユーリ、スニの三人共すぐに頷く。三人共とにかくアイが何を知ってるのか、知ったのかを知りたかった。「ああ、あなた達は来ない方がいいわ」

ついてくるつもりだったのかはミーノレスにはわからなかったが、カメ達にそう告げるアイ。

「わかった」

カメも特に何かを疑問を持った様子もなく素直に頷く。

「夢見てる気分だ」

魔物の森のどこか、そこだけ大火事があったかのように丸く黒い焼け野原となっている場所。目の前の光景が信じられず呟くスニ。

「夢ならよかつたわ」

言いながら、倒れている白い木でつくられた巨大な人形のような生物に生えたハトのそれとよく似た羽に触れるアイ。

「天使の、死体？」

すぐに考えつくミィノレス。

「ええ、それもこの羽、この感じ、おそらく高位天使よ」コウイテンシ

天界の天使の死体。それをよく知らないミィノレスでもそれから感じる何かははつきりわかった。

「スプラ」

「カエサル」

ほとんど同時に叫ぶネイトレッサとファイロ。

ファイロは水のような液体に瞬時に変わり、泡のようにはじけ、ネイトレッサは地面に凄い勢いで叩きつけられた。

ファイロの泡は再び集まり、すぐに人の形を成し、ファイロに戻った。

ネイトレッサは叩きつけられたまま地面にめり込むが、それと同じだけファイロの後ろの土が小山のように突き出てきた。

そして突き出た小山が宙に浮き、ファイロにぶつかろうとした瞬間に凄まじく早く振り向くファイロ。

「シール」

ファイロがそう叫ぶと小山はさらに宙に上がり、ファイロを避け、ネイトレッサが埋まった地点へと降り注いだ。

しかし小山は地面に落ちる事なく粉々となる。ネイトレッサの地点からまるで火の龍のような何かが飛びだし、小山を粉碎し、そのままファイロを飲み込んだのである。

そして瞬間、龍は消えネイトレッサはいつの間にか龍の口のあった辺りに平然といて、ファイロは胴体があった辺りで燃え盛っていた。

「ああ」

悲鳴を上げたかと思うと火は消え去り、そしてファイロは倒れた。

「くっ」

息を切らし膝をつくネイトレッサ、彼が振り向くのと倒れたファイロが煙のように消えたのは同時だった。

「ネイサ」

「大丈夫だよ」

心配そうなラグに立ち上がり笑顔を見せるネイトレッサ。

「大丈夫、それに急ごう、さっきのファイロもただの時間稼ぎの偽物だ」

言いながら戦車に戻り、再び発進させるネイトレッサ。

「偽物？」

「ああ」

「さっきので？」

戦車が再発してすぐ、少し不安になるラグ。

「強さは同じさ、さっきのあれはクローン、要は本体の完全なるコピー、面倒な術だよ」

もう息は切らさず、余裕そうなネイトレッサ。

「ネイサは出来ないの？」

「あれは無理だ、でも心配しなくていい、あれほど完璧に自分と似た存在を生み出すのはさすがの奴、ファイロだって簡単に出来る事じゃない、おそらくかなりの、それも自分自身の代償を払ったはず、つまり今はかなり弱ってるはずだし二度とあれほどのクローンなんて生めないよ」

ラグを安心させるネイトレッサの笑顔の言葉。そしてネイトレッサはラグが気づいていない自分の不安は口にしなかった。

ネイトレッサはファイロが二度と完璧なクローンを生めないと言ったが、それはまさしく言葉通り、おそらく魔術まで完璧に再現されているようなクローンなど彼はこの先永遠に生めないだろう。それほど代償は払ったはず。

そしてファイロにとっても白銀の呪いに耐えたミノレスは様々な意味で非常に興味深い事だろう。しかし果たしてファイロは自分の

この先永遠の魔術の弱体化をさせてまでの価値を彼に感じるだろうか？考えつく答は一つだけだった。ファイロはネイトレッツサには気づけなかったミーノレスの何かを知っているのだ。

天使には階級がある、全ての創造主たる神に最も近い存在、高位天使。高位天使に使える下位天使<sup>カイトンシ</sup>。地上の生物の中で、偉大なる魂が天界へと迎えられた存在、血天使<sup>チテンシ</sup>。歴史上、地上に高位天使が現れた事は地上世界が創造されたわずかな時間だけだったと言われている。

「だから信じられないわ、高位天使がこうなる理由は」「理由は？」

黙り込むアイに呟くユーリ。

「天界の戦争」

答えたのはスニだった。

「確かにそれくらいよ、確かな事はこの高位天使がもし殺されたなら」

そこで一旦ぶるぶると体を震わせるアイ。

「それは同じ高位天使かもしくは神の仕業よ」

それからしばらく誰も喋る事なく、それぞれがそれぞれなりに今の状況を考えた。

「ミーノレス、ユーリ、スニ」

唐突に沈黙を破るアイ。

「アイ？」

呟くミーノレス。

「あなた達先にカメ達の所へ戻ってなさい」

「ア」

「アイさんを信じようミーノレス」

「あ、ああ」

目を閉じ神経を研ぎ澄ませているようであるアイのただならぬ様子

を感じ取り、大人しく言う通りにカメ達の元へと戻って行くミーノレス達。

「姿を現しなさい」

ミーノレス達が去ってしばらく、目を見開きとある方向に顔を向けるアイ。

「思った以上に強力な力、アイさん、あなただけは完全に予測可能な存在でしたよ」

まるで地面から生えてきたように、現れるローブにダーバンをつけた、青年姿のグラーシャラボラス

「あなたは、悪魔ね」

「ええ、グラーシャラボラスという者です。以後お見知りおきを」警戒しているアイに対し、グラーシャラボラスはずいぶんと平然としていた。

「動きを止めるのは無駄ですよ」

しばらく互いにじっとしていた二人だったが、咳き右手を上上げるグラーシャラボラス。

「たかが悪魔が生意気ね」

言いながらもさらに気を引き締めるアイ。牽制として放った、ある魔術がまったくかからなかったからだ。

放たれた魔術は力ナ、動きを少しの間封じる術で、基本的な物ではあるが、しかしまったくかからないのは人でも悪魔でも普通ではない。

「ルーベ」

アイが叫んだ瞬間グラーシャラボラスを緑の絵の具のような何かが覆った。

「残念ですね」

グラーシャラボラスがそう言った時にはすでに、風にも飛ばされたかのように緑のそれはかき消えた。

「あなたは神から遠すぎる」

「あなたは悪魔から遠すぎるわよ」

一步近づくとグラシーアラボラスに一步下がるアイ。

「確かにそれはそうですね、というよりも私は生物とすら呼べないかもしれないですね」

「私はそれ以外の者が天使になる条件を知ってる」

尚も近づくとグラシーアラボラスに、もう下がりはいらないアイ。

「他の何の条件をクリア出来ても、神か数人の高位天使からの許しを得るなんて悪魔には絶対無理よ」

天界以外の者が天使になる為の条件の中で最も難しいものだ。

「冥土の土産に一つ教えてあげましょう」

そしてもう間近に迫ったアイの頭にぱんと手を乗せるグラシーアラボラス。

「神などもうこの世界にはいないんだよ」

グラシーアラボラスがそう言ったのとアイが灰になったのは同時だった。

「うっ」

途端に胸を押さえ苦しみみだすグラシーアラボラス。

「本当に、やりませぬ」

そう最後に言い残し本当の意味で灰になったのはグラシーアラボラスの方だった。

「これは、確かに、軽く死ぬるわ」

いつの間にか近くの大きな木にもたれかかっていた全身傷だらけで満身創痍のアイ。

グラシーアラボラスは確かに天使となっていた。そしてアイのような白の魔術師はその存在からは最も遠く、まともに戦えば確実に勝てない存在である。白魔術師から放たれる全ての術がまったく通じないのだから当然だ。

だからアイは一旦死体である高位天使の体を通してグラシーアラボラスに攻撃をしたのである。グラシーアラボラスは知らなかったかもしれないが、死体に気づいていなかったようだが、死体といえども、そして白魔術といえども高位天使の体を通しさえすれば、下位

天使や血天使には抵抗なく影響を与えられるのである。

「運の悪い人」

天使の死体、油断しきっていた天使の悪魔。敵の運が悪いというより自分の運がよかったのかもしれない。

考えながらアイは怪我にも疲れにも耐えきれず、その場で眠りについた。

「まだ悪夢は続いてるみたいだ」

目の前の惨状を前に真つ先に呟くスニ。

「直に覚めるさ、死後の世界でな」

言いながら唾然とするミーノレス達に振り向く、血だらけで倒れたカメ達の一番前に立ったファイロ。

その残酷な笑みにミーノレスは生まれて初めて本当の恐怖を垣間見た気がした。



## 12、もうひとつの始まり

(天使達は人より少ない、昔はそうして地上と天界の均衡が保たれていた、もう昔の話だが)

天界生まれでない者が天使になる為の方法は四つのある条件を満たす事のみである。その条件とは、自分の死を身近に感じる事、何も殺さずに何かと触れ合う事、何も動かさず何かと伝え合う事、そして複数人の高位天使、または神にその資格を認められる事。

「こんなのあるえない」

走行中の戦車で、彼にしてはかなり珍しく、目に見えて非常にうるたえるネイトレッサ。

「ネイサ？」

「僕は大丈夫、だけど」

理由もわからずただ不安そうなラグに力ない笑みを見せるネイトレッサ。

「それなら世界は大丈夫じゃないかも知れない」  
そう言った。

「お前」

スニが叫ぶのとほぼ同時にエクスを放つミーノレス。それは命中したが、ファイロはこれまで撃たれた誰もがそうしたような反応は特に見せず、身じろぎしなかった。

「恐ろしい武器だ、ネイトレッサは昔からそうだった」

しばらくして唐突に呟くファイロ。

「ファイロ、お前は」

何を考えているのか緊張した表情ながらも笑みを浮かべるスニ。

「ファイロ？こいつが？」

彼とは初対面のユーリ。

「お前達は俺には勝てない」

「戦わないで死ぬなら戦って死ぬ」

言って再びエクスを今度は連発するミーノレス。しかし今度はファイロには一発も当たらなかった。何か魔術を使っているのか、ゆっくりと横に歩いているようにしか見えないのに、なぜか一発も当たっていないようだった。

「うっとおしい」

「うっ」

そしてまた唐突にそれを引き寄せ、ミーノレスからエクスを奪うファイロ。

「何より強い防護だな」

言いながらエクスを地面に叩きつけるファイロ。ミーノレス達にはそれほど強く叩いたようには見えなかったが、それは粉々に砕け散った。

と同時だった。いつの間にかファイロの死角から間近に近づいていたユーリは、彼の喉元に思いつきり肘打ちをくらわした。

「やつ、えっ」

少し揺らめいたファイロの顔面にパンチを見舞ったユーリは、その感触に何より驚いた、喉元は確かに普通だったのに、ファイロのその顔面ときたらまるでスライムのような感触だった。

「あああっ」

そしてすぐに引つ込めた手を抑え苦しみ出すユーリ。

「ユーリ」

心配そうに叫びながら落ちていた手の平ほどの大きさの岩を拾いファイロに襲いかかろうとするミーノレス。

「人間ごときが」

「うっ」

ファイロが指を向けると岩は急にとてつもなく重くなり、とても持たずにミーノレスはそれを落とした。

「あ」

下敷きになり潰れ干切れる右手の小指と薬指、ミーノレスは劇痛に大きな声も出なかった。

「スニよ、おま」

そうしてスニに振り向くやいなや、言葉を止めすぐさま目を閉じ両手を広げるファイロ。同時に意識を失い、そのままスニの足下へと飛んでくる、苦しんでいたミーノレスとユーリ

「ニミガ」

スニがそう唱え数秒、何も起こらないのに一番驚いたのはスニだった。

「何で」

「惜しかったな」

本気でまったく意味がわからないという感じのスニに、ニヤリとするファイロ。

「子供でもやはりあのネイトレッサの弟子という訳か」

「何をした？」

ファイロは心底感心しているようであったが、スニはかなり不機嫌だった。

「お前の魔術の発生をその途中で止めたんだよ、ネイトレッサはこの技を教えはしなかったろう、いくら精神が怪物でも器が人間なら仕方がない」

「器？人間？何を言ってる？」

実際には認めたくなかったただけかも知れない、それでもまだまったく答がわからないようにうるたえるスニ。

「もう隠すのも飽きたしな」

そこまで言っただけになり背中から真っ白な翼を生やすファイロ。その瞳もいつの間にか真っ白に輝いていた。

「すぐに師も送ってや」

「逝くのはお前一人だよ」

唐突に現れたネイトレッサの戦車の砲撃で、何かをしようと右手を

上げたまま数メートル吹き飛ばされるファイロ。

「師匠」

ナイトレッサの姿を確認し、ひとまずは安心したのか、膝をつくスニ。

「安心するのは早いよスニ、それに禁術を使おうとしたね、無事に事が住んだら三日の説教だよ」

「はは」

師のいつもの調子に不謹慎ながら思わず笑みもこぼすスニ。

「まあそれは後だね、さあファイロ、そろそろ僕らもちゃんと決着を着けようじゃないか」

そしていつになく真剣な顔つきで、持っていた短剣を、ゆつくりと立ち上がるファイロに向けるナイトレッサ。

「前から機会があれば直接聞こうとは思っていた事を今まさに聞こう」

真っ直ぐ立ったが顔は俯いたまま口を開くファイロ。

「何だい？お前が僕に聞きたい事なんて、ちょっと想像つかないぜ」  
どこか懐かしそうに、しかし悲しそうな笑みを一瞬浮かべるナイトレッサ。

「ナイトレッサ、お前はやはり本当に怪物の類で、実は人じゃないんじゃないのか？これは純粹な疑問だ」

本当にただ不思議そうな顔をするファイロ。

「僕がもし人じゃなければ」

短剣を持った右手を下ろし、空いていた左手の平を見るナイトレッサ。

「お前が今みたいになる前に、お前を殺してたと思うよ」

「もうそれは全てが遅いがな」

そして目を閉じ、今度は両手で短剣を握るナイトレッサに、余裕の笑みを浮かべるファイロ。

「ファイロ、僕らは同じ師の元で学んだ、そして少し前にお前は彼女のミスだと僕は言ったけど、それは違ってたみたいだ」

目を開き再び短剣を片手だけで持ち、今度はファイロでなく戦車に向けるネイトレッサ。

「それは面白いな、だがエズエラはもういない、今は俺とお前のことだから、俺はお前を殺す」

言いながらしゃがみ自らの翼に包まれるような形になるファイロ。

「やってみなよ、どうやったかは知らないけど天使なんかで人間様に勝てると思うな」

そしてほぼ同時に煙のように消え去る戦車。と同時に謎の衝撃波によってネイトレッサは後方へ飛ばされた。

「トリト」

空中でぐるりと一回転し、吸い寄せられるように地面に足をつき、そう叫ぶネイトレッサ。

そして言ったのが早いのか、それが起こるのが早いのか、あつという間にまるで竜巻が上へ登って行くように、巨大な氷の柱がファイロを飲み込み細長い冰山となる。

「この程度か？」

いつの間にか冰山の中に空間が出来ていて、余裕の表情でそう告げるファイロ。

「本気でそう思ったなら心外だよ」

もはやネイトレッサが何を言ったのか本人以外のその場の誰もわからなかった。どこからともなくファイロ目掛けて降り注いで来た燃える岩石が氷を壊し、ぶつかり合う音が凄まじすぎたのだ。

数分続いたその攻撃が止んだ時、地面からは浮かび、大量の岩石と氷が集約された、ぎりぎりファイロが包まれているくらいの大きさの丸い塊だけがそこには残っていた。

「ルーホ」

何となしにネイトレッサがそう言うと、塊は回転しながら、ただゆっくりと凝縮し、すぐに目に見えない程度の大きさとなり、もうファイロの姿も氷も岩石も轟音もそこにはなかった。

「殺、したの？」

いつの間にかミーノレス達のすぐ近くに来ていたラグ。

「生きてるとは思えないけど」

ネイトレッサがそう言ってから数分、ファイロが消えた辺りの地面から、唐突に吹き出したマグマが人の形となり、そしてファイロとなった。その背中にはもう羽がなく、目も黒かった。

「ファイロ、大したものだけど」

ただ静かに呟くネイトレッサ。

「お前の負けだ」

ネイトレッサがそう告げた時には、もうファイロは倒れていた。

「これで終わり、ですか？」

「ああ、後は帰るだけだ、ミーノレス達を起こそう」

ほとんど放心状態のスニに、もうすっかり緊張感は消え失せ、笑顔のネイトレッサ。

天界には時という概念はない、ただ空間と物がそこにあり、天使達という生命がそこで各々自由に存在している。

地上のデイスキアに似ているがその全てが石で出来ている街カンヘル。高位天使であるミガエルはもう数千年もの昔からそこにたった一人で暮らしていた。美しい銀色の装束に銀色の長い髪の、青年姿の天使。

「何の用だ？カイン」

「聞きたい事がある」

尋ねて来た古い友人、同じ高位天使であり、服装こそ同じだが黒髪で顔立ちも背丈もミガエルに比べて少し幼い少年天使カイン。

「それは珍しい」

心底意外そうなミガエル。

「ああ、ミガエル、あんたはここにまだいる、て事は与えられた使命をまだ守ってるって事だろう？」

「そうだな」

カインの言葉にミガエルはますます意味がわからなくなったようだ

った。

「ならまだ神は最初の場所にいる訳だ、なら今の地上に現れたあれは、下位天使共、血天使共が神だと騒いでるあれは何だ？」

ミガエルは一瞬カインの言った言葉がうまく理解出来なかった。そして意味を理解した時頭の混乱はさらに増した。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8035/>

---

メーデー

2011年11月16日01時54分発行